

報告書

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要11

〔於紅ヶ谷地区〕

2001年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要11

●
[於紅ヶ谷地区]

2001年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

ユネスコでは、1972年に「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」が総会で満場一致で採択され、現在世界で161ヶ国が締結、日本も平成4（1992）年に締結いたしております。

条約の目的は、顕著な普遍的価値を持ち、その保護がすべての人々の責任であると考えられる「世界遺産リスト」を作成することと、国際協力を図ることといわれます。

平成12（2000）年11月、文化財保護審議会世界遺産特別委員会において、日本からユネスコに提出される文化遺産の候補物件のひとつとして、石見銀山遺跡を選定いただきました。このことによって石見銀山遺跡が日本を代表する鉱山遺跡であることを、改めて衆目にしたわけではありますが、ここに至るまでの間、数多くの先達や先人たちによって保護されてきたことに、深く敬意を表するものです。

石見銀山においては、昭和32（1957）年に大森町文化財保存会が結成されて以来、数多くの方々のご努力とご協力によって保存の努力がなされてきました。特に昭和44（1969）年には、鉱山遺跡としては日本で初めての史跡指定、昭和62（1987）年には町並みが重要伝統的建造物群に選定されるなど、保存への道のりを歩んできています。

遺跡の発掘調査は昭和58（1983）年を端緒とし、平成8（1996）年からは島根県教育委員会と大田市教育委員会での合同調査が行なわれ、遺跡の遺存状況の良さと、その歴史的価値の高さが次第に明らかにされてきたところでございます。

今回刊行いたしましたこの調査報告は、平成10～12年に実施した於紅ヶ谷地区的調査に係るものでございます。

調査に際しましてご協力いただきました関係各位に衷心から厚く御礼申しあげ、本書が今後の調査研究及び整備活用等に供されれば幸いに存じます。

平成13年3月

島根県大田市教育委員会
教育長 大久保 昭夫

例 言

1. 本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となり、島根県教育委員会と共同で実施した。
3. 本書の内容は、平成10~12年度の調査成果のうち、於紅ヶ谷地区についての概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡発掘調査委員会〕

田中 琢（前奈良国立文化財研究所所長） 田中圭一（元筑波大学教授）
田中義昭（元島根大学教授） 脇田晴子（滋賀県立大学教授）
藤岡大拙（島根県立女子短期大学学長）
小寺八郎（同和鉱業㈱取締役管理本部副本部長 平成10~11年度）
澤田谷和（同和鉱業㈱総務・法務部門部長 平成12年度）
畠本晴隆（同和鉱業㈱コーポレイトスタッフ総務部門部長 平成12年度）
熊谷國彦（島根県大田市長） 安田増憲（島根県温泉津町長）
池龜 貴（島根県仁摩町長）
山下嘉三（島根県教育委員会教育次長 平成10~11年度）
井上勝博（島根県教育委員会教育次長 平成12年度）

〔事務局〕

島根県大田市教育委員会 文化振興室

〔調査員〕

大田市教育委員会 大國晴雄・遠藤浩巳・中田健一
島根県教育委員会 広江耕史（平成10年度） 目次謹一（平成10~11年度）
 松尾充晶（平成11年度）
 鳥谷芳雄・守岡正司（平成12年度）

〔調査補助〕 山崎美和

〔遺物整理〕 中川英子・高村玲子・涌井葉子・太田洋子・荒川あかね・嶋田雅子

〔調査指導〕

文化庁記念物課

奈良国立文化財研究所

5. 下記の方々から多くのご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を表すものである。(敬称略・五十音順)
 池田善文・内田俊秀・岡 泰正・河瀬正利・小池伸彦・小泉和子・高田 潤・玉井哲雄
 鳥越俊行・中村唯史・細見敬三・村上 勇・村上伸之・村上 隆
6. 掘団の縮尺は、図中に示した。
7. 掘団中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。またレベル高は海拔高を示す。
8. 第1図・第2図は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。
9. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。
 S B - 建物跡 S D - 溝跡 S K - 土坑 S X - 炉跡、特殊遺構
10. 本書の執筆は調査員が分担してを行い、本文目次に示した。編集は中田が行った。
11. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構・遺物図版中における表現は下記の基準で使用している。

これ以外のものについては、個別に図中に示した。

〔遺構〕



被熟土壌



岩盤



炉壁



黄色粘土



灰白色粘土



灰色土



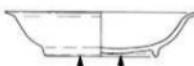
カラミ (精錬滓)



黒色土 (炭層)

〔遺物〕

・図中の▼印あるいは一点鎖線 (図中↑箇所) は施釉範囲の境界を示す。



煤



膜状付着物

本文目次

第1章 位置と環境	(中田)	1
第2章 遺跡の概要		5
第1節 石見銀山史抄	(中田)	5
(1) 発見から灰吹法の導入		5
(2) 争奪戦と徳川の掌握		6
(3) 江戸期の石見銀山		6
(4) 近代の銀山開発	(遠藤)	7
第2節 石見銀山遺跡の概要	(遠藤)	7
(1) 銀山地区		7
(2) 大森地区		8
(3) 関連地区		8
第3節 これまでの調査の概要と目的	(中田)	9
第3章 調査の経過と概要	(中田)	12
第1節 調査の経過		12
第2節 平成10年度の調査		14
第3節 平成11年度の調査		14
第4節 平成12年度の調査		16
第4章 遺構と遺物		18
第1節 層序と上層の遺構	(中田)	18
第2節 建物跡	(中田)	20
第3節 土間面上の遺構	(鳥谷・中田)	22
第4節 No267間歩前トレンチ	(鳥谷・守岡)	25
第5節 No49間歩前トレンチ	(中田)	27
第6節 調査区内出土の遺物	(守岡)	30
第5章まとめと課題		40
第1節 平坦面と間歩について	(中田)	40
第2節 出土遺物について	(守岡)	41
(1) 陶磁器からみた於紅ヶ谷地区の時期		41
(2) 於紅ヶ谷地区出土陶磁器の組成		41
(3) 石見銀山遺跡内の陶磁器組成		42
(4) 富田川河床遺跡との比較		42
(5) 於紅ヶ谷地区的陶磁器		43
(6) まとめ		43

挿図目次

第1図	石見銀山遺跡位置図 (S = 1/150,000)	1
第2図	石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1/25,000)	4
第3図	於紅ヶ谷地区調査区配置図 (S = 1/1,500)	13
第4図	調査前地形測量図 (S = 1/300)	15
第5図	年次別調査範囲図 (S = 1/300)	15
第6図	トレンチ平面・断面図 (S = 1/30)	16
第7図	調査区内土層図1 (S = 1/60)	19
第8図	調査区内土層図2 (S = 1/60)	19
第9図	調査区内土層図3 (S = 1/60)	19
第10図	調査区内土層図4 (S = 1/60)	19
第11図	遺構配置図 (S = 1/150)	21
第12図	S K 0 1 平面・土層図 (S = 1/60)	23
第13図	S K 0 2 平面・土層図 (S = 1/15)	23
第14図	S K 0 3 平面・土層図 (S = 1/30)	23
第15図	S X 0 1 平面・土層図 (S = 1/15)	23
第16図	S K 0 5 平面・土層図 (S = 1/60)	23
第17図	石積み施設平面・土層図 (S = 1/30)	24
第18図	石集積部分実測図 (S = 1/60)	24
第19図	No.267間歩トレンチ平面・土層図 (S = 1/60・1/80)	26
第20図	No.49間歩トレンチ平面・土層図① (S = 1/60)	29
第21図	No.49間歩前トレンチ平面・土層図② (S = 1/60)	29
第22図	No.49間歩前トレンチ平面・土層図③ (S = 1/60)	30
第23図	於紅ヶ谷地区出土遺物(1) (S = 1/3)	33
第24図	於紅ヶ谷地区出土遺物(2) (S = 1/3)	34
第25図	於紅ヶ谷地区出土遺物(3) (S = 1/4)	35
第26図	於紅ヶ谷地区出土遺物(4) (鉄製品・青銅製品・からみ・土製品・石製品) (S = 1/3、27のみ1/6)	36

本文写真目次

写真1	上空から見た仙ノ山	2	写真8	鉄鍋出土状況	11
写真2	元和年間石見国絵図	3	写真9	石銀藤田地区	11
写真3	柄畠谷Ⅱ区下層確認トレンチ	5	写真10	調査委員会（平成11年度）	12
写真4	龍源寺間歩四ツ留役所跡	9	写真11	現地説明会（平成11年度）	12
写真5	藏泉寺口番所跡	10	写真12	上空から見た於紅ヶ谷地区	14
写真6	下河原地区	10	写真13	ガラス簪	35
写真7	石銀千疊敷地区	10			

表目次

表1 出土遺物観察表1	37	表8 №49間歩遺物集計表	45
表2 出土遺物観察表2	38	表9 №267間歩遺物集計表	45
表3 小石集計表（番号はPL. 23下段と対応）	38	表10 平成12年度第2トレンチ遺物集計表	45
表4 出土地点表（写真図版のみの遺物）	39	表11 その他の調査区遺物集計表	46
表5 出土遺物集計表1 (%)	42	表12 於紅ヶ谷地区総破片数	46
表6 出土遺物集計表2	43	表13 於紅ヶ谷地区総破片（石見焼以外）	46
表7 H10年度第2トレンチ遺物集計表	45	表14 於紅ヶ谷地区総破片（石見焼・不明以外）	46

写真図版目次

- P L. 1 : 上空から見た於紅ヶ谷地区（東から）、同上（南から）
P L. 2 : 調査区全景（北から）、同上（南西から）
P L. 3 : 調査区北東壁土層（南西から）、西セクション土層（南東から）
P L. 4 : 西セクション土層（南東から）、同上（南東から）
P L. 5 : 6 T 北壁土層（南西から）、ズリの堆積（東から）
P L. 6 : 石垣検出状況（北東から）、岩盤検出状況（北から）
P L. 7 : 石集積部分検出状況（北西から）、同上（南西から）
P L. 8 : 平坦面南側検出状況（北東から）、石積み施設検出状況（南西から）
P L. 9 : SK 0 1 検出状況（北から）、同上掘り下げ状況（南西から）
P L. 10 : SK 0 2 検出状況（南東から）、SK 0 3 検出状況（北東から）
P L. 11 : SX 0 1 検出状況（南東から）、SK 0 5 検出状況（北西から）
P L. 12 : 平坦面西側斜面検出状況（南東から）、西トレンチ内遺構出土状況（南東から）
P L. 13 : №49間歩調査前（南から）、同上掘り下げ状況（南から）
P L. 14 : №49間歩1 T 掘り下げ状況（西から）、同上（南から）
P L. 15 : №49間歩掘り下げ状況（東から）、№49間歩1 T 拡張部分（西から）
P L. 16 : №49間歩1 T 拡張部分（南から）、№49間歩2 T（南から）
P L. 17 : №49間歩2 T 北側部分（南から）、№49間歩2 T（西から）
P L. 18 : №267間歩調査前（北西から）、同上完掘状況（南東から）
P L. 19 : №267B間歩完掘状況（北西から）、№267B間歩坑口（北西から）
P L. 20 : №267B間歩坑口（北西から）、同上内部（北西から）
P L. 21 : 於紅ヶ谷地区出土遺物1、於紅ヶ谷地区出土遺物2
P L. 22 : 於紅ヶ谷地区出土遺物3、於紅ヶ谷地区出土遺物4
P L. 23 : 於紅ヶ谷地区出土遺物5、於紅ヶ谷地区出土遺物6
P L. 24 : 於紅ヶ谷地区出土遺物7
P L. 25 : 於紅ヶ谷地区出土遺物8、於紅ヶ谷地区出土遺物9
P L. 26 : 於紅ヶ谷地区出土遺物10、於紅ヶ谷地区出土遺物11

第1章 位置と環境

島根県は東西に長く、日本海に面して600kmに及ぶ海岸線を有している。旧国では出雲、石見と島嶼の隠岐の3国からなり、石見銀山は「石見国」の東側いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

出雲では、斐伊川をはじめとする河川によって、ややまとまりのある沖積平野が形成されて

いる。これに比して石見では、江の川や周布川等の河口近くに平野は認められるが、海岸に至る山地帯によって沖積平野は広大には広がっていない。海岸部に近い山塊群に象徴されることにより、「石海」や「石美」あるいは石群に石見の語源があるともいわれている。

山陽と山陰を隔てる中国山地の山並みから派



第1図 石見銀山遺跡位置図 ($S = 1/150,000$)

生した山地帯には、石見南部特有の高原地帯がひろがり、断魚溪や千丈溪といった瀑布線によって急激な高低差を見せる。加えて三瓶山（標高1126m）や大江高山（標高808m）などといった火山が分布し、山地帯とその間を縫う河川によって形成された小規模な可耕地や小集落が多く点在している。銀山の面影を伝える大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区も、こうした狹長な河岸段丘上に形成されている。



写真1 上空から見た仙ノ山

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、大江高山から北へ4km、日本海から直線距離にして6kmの地点に位置する。大江高山は大山火山帯に属し、前期更新世に活動した火山といわれ、溶岩ドームのまとまりからなっている。仙の山はこの大江高山火山岩類の分布域にあり、角礫化火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角砾岩等を鉱脈の母岩とする。鉱脈には鉛鉱床型の福石鉱床、鉛鉱床型である永久鉱床、とマンガン鉱床という三つの鉱床が賦存していることが知られている。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀などが含まれる。

石見銀山遺跡はこうした地恵によって形成されたものであり、周辺の歴史においても地形的な要因から石見独特ともいえるような特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

縄文・弥生時代では、石東では発掘調査によ

る資料が乏しかったが、近年の調査によって次第にその様相が明らかとなってきた。仁摩町古屋敷遺跡は、潮川の河岸に形成された遺跡で、縄文時代晚期～弥生時代前期の遺物が土坑中から一括出土し、貴重な資料となった。潮川沿いには他に弥生時代の円形杭列が検出された川向遺跡が知られる。大田市鳥井南遺跡は日本海を望む丘陵上に展開した遺跡で、弥生時代から古墳時代の堅穴住居跡が多数検出されている。

9、10世紀代の遺跡では、縄軸陶器が出土した仁摩町白石上屋敷遺跡や円面鏡の出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁をも出土していることに加えて、河口に近い河岸という立地から、海上交通の存在を予感させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では古墳時代の住居跡の他に、奈良平安期の建物跡や木簡が多数出土している。

平安末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な莊園が成立していることが知られており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの莊園、国衙領が成立する。南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見の守護となるが、応永の乱の後に石見守護職を没収される。しかし大内盛見は邇摩郡を分郡として与えられ、この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれることになった。永正（1504～1521年）段階に至ると大内義興が石見一円の守護権を取り戻し、大内氏の支配下のもとに石見銀山が本格的な開発が行われたといわれている。

戦国期には大内氏と尼子氏、そして毛利氏とが銀山領有をめぐって争奪を行い、その結果多数の城館が周辺に造られている。江戸期に入ると石東の安濃郡と邇摩郡は石見銀山領となって直轄支配され、明治維新後には大森県が置かれた後に浜田県となり、明治9（1876）年には出雲、隠岐、石見からなる島根県が設置された。

ところで、海外で制作された日本地図に旧国名「石見」や石見銀山の記載があることが知ら

れている。石見銀山と確認されるもので最も確実な例は、1595年のティセラ日本図である。スペイン王室の地図作家であったボルトガル人L.ティセラは、1592年にA.オルテリウス宛に以下のようない書簡を送ったといわれる。それは、「二枚の図すなむち中国図と日本図をお届けします。これらは新しく実際通り描かれたものです」という。オルテリウスはこの日本図を『世界の舞台』という世界地図帳の1595年増補版に掲載する。[資料1]

ティセラの描いた日本図には、「石見」の国名のあたりに、ラテン語で「銀鉱山」(Argenti fodiæ)と記されていて、石見銀山を表していることが注目される。

同様に「銀鉱山」を記した地図は、1595年影版、1596年刊行のリンスホーテン『東方案内記』付図、ラングデン・インド以東図に見える。この図における日本は、いわゆる「エビ型」(ドラード型)をしており、1563年のルイスによるインド以東図あるいは東アジア図に見られる形狀である。その原図となったのは1523年初刊、1530年重刊の明・薛侯による『日本國考略』所載日本地理図であるともいわれている。[資料1]

17世紀に入っても石見における「銀鉱山」の表記は見ることができ、1605年メルーラ『天地万有誌』所載世界図、1613年J.メルカトルの日本図など、いずれも日本の中では唯一の銀鉱山の表記となっている。



写真2 元和年間石見国絵図

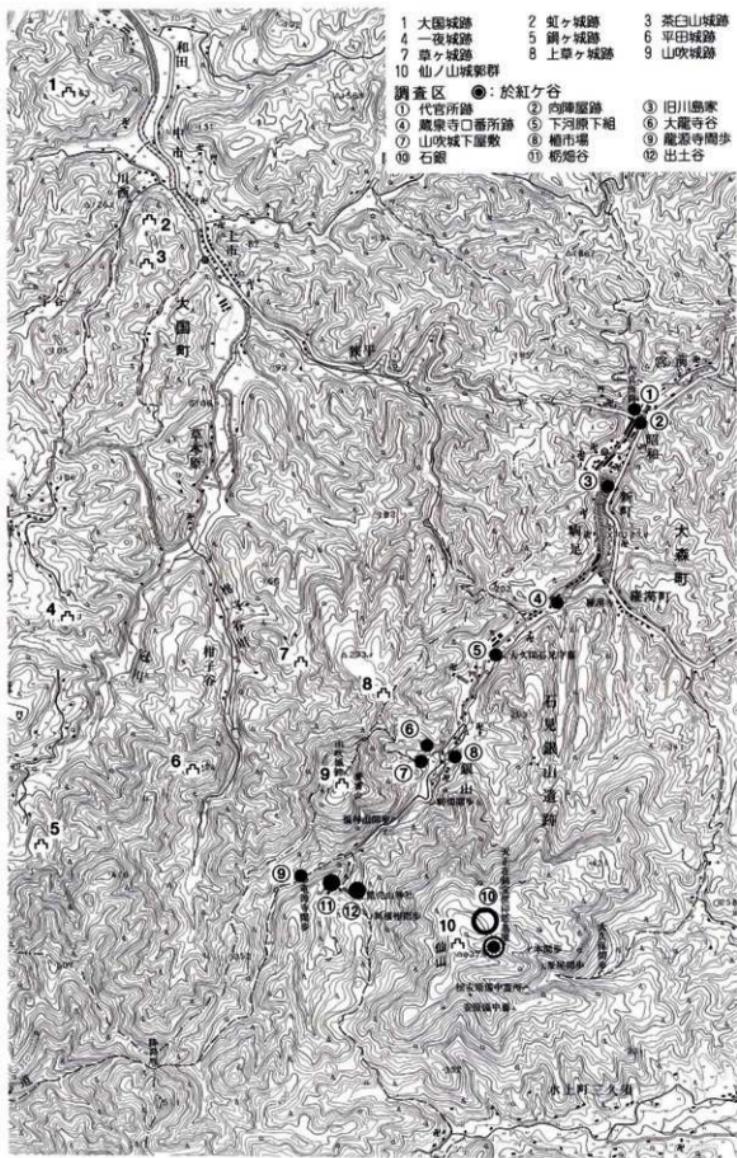
海外の地図と同じように、日本の江戸期の国絵図には石見銀山が詳細に描かれている。石見

の国絵図では現存するもので以下のものが知られており、年代順に「元和年間石見国絵図」(1615~1624年)、「寛永(十年)石見国絵図」(1633年)、「正保二年石見国絵図」(1645年)、「石見国天保国絵図懸紙改切絵図」(1830~1844年)である。(以下、それぞれ「元和絵図」等と記す)。

いずれも石見銀山周辺には柵列を巡らせた表現が読みとれる他、柵の内外を結ぶ道も記している。なお、絵図では経年によって石見銀山における口番所の数が減少することが指摘されている。すなわち、「元和絵図」では、10カ所あった口番所が、「正保二年絵図」では9カ所、「天保絵図」では8カ所とされる。[資料2]

しかしながら、柵の内部から外部に通じる道で見るならば、「元和絵図」では、10本が確認されるが、「正保絵図」では7本、「天保絵図」では6本と減少が著しい。その反面、描かれた口番所を観察すると、「正保絵図」において減少が指摘されている口番所は、「曾根口」と表現されている横に門の絵が描かれており、それに至る道の朱書き線がある。このことは「曾根口」の横に位置していた「水落口」が描かれていると見られ、「天保絵図」でも、同様に建物の絵の表現の横に門が描かれる部分がある。この建物を口番所と見れば、石見銀山の柵の内に入り出する箇所はいずれも10カ所を数えることとなる。

また、柵の外に描かれた道からも、銀山とその周辺の変遷を辿ることができ、「元和絵図」では山吹城の表現とともに、三久須、白坏等に口屋が描かれているが、「正保絵図」「天保絵図」ではこれらが見あたらない。反対に後者二者には「御運上藏」が描かれ、朱線の道が明記されている。陸路では、「大森下口」を発して「堂原」、「別府」「小原」など銀の輸送に関連した地点を窺い知ることができる。



第2図 石見銀山遺跡分布図 (S = 1 / 25,000)

第2章 遺跡の概要

第1節 石見銀山史抄

(1) 発見から灰吹法の導入

石見銀山は、延慶2(1309)年に大内氏によって発見されたという伝承が残るが、これを裏付ける遺構遺物は今のところ確認されていない。しかし近年、大森町内の発掘調査などによって、古代の須恵器が採取されていることが知られるようになった。遺物は小片のため詳細な時期の特定は困難であるが、概ね古墳～奈良時代にまで遡る形をし、銀山の発見開発とは直接の関連は別としても、古代には既に銀山周辺において生活の跡が認められる。

『石見銀山旧記』(以下、「旧記」という)では開発当初の様子を、「生銀を湧し」「山下山上皆皓々然として冬山の日白山の雪を踏むがごとく」と記し、その後「此時迄は地を掘り間歩を開くことを知らざりし故上鉢の鎖を取り尽くし」と自然銀採取のことを記載している。

この当初の発見伝承と、16世紀初頭に博多商人の神屋寿禎が行う本格的な開発との対比から、神屋の開発を、再開発や再発見と表現することが一般的となっている。

神屋寿禎の開発は、出雲鷲羽山の山師三島清右衛門とともに金堀(穿通子)の吉田与三右衛門、吉田藤右衛門、於紅孫右衛門らによって、大永6(1526)年に始めたと「旧記」では伝える。近年の研究では、このうちの於紅孫右衛門について、「高野山淨心院往古旦家過去帳姓名録」にみえる「山神ヲベニノ子孫 吉田孫右衛門シウトメ」との記事から、於紅孫右衛門は実在の人物で、吉田姓を名乗っていたのではないかともいわれている。

また、銀山再開発と同時期の大田市南八幡宮経筒に、「川上郡 穴田 吹屋六郎 大永二年 今月吉日」とあり、大永2(1522)年に備中の吹屋が石見にきていることが注目されている。

一方、発掘調査の成果では、古い様相を示す

遺物や遺構が知られてきている。柄畠谷Ⅱ区下層確認トレンチ内のS D02より出土した遺物がそれである。



写真3 柄畠谷Ⅱ区下層確認トレンチ

時期は数点を除いて15世紀後半から16世紀中葉までの範囲内におさまるものである。さらに14世紀後半から15世紀初頭の年代銘が与えられる中国製青磁瓶の破片も1点出土している。

石見銀山の歴史において大きな画期となった灰吹法の伝来は、天文2(1533)年といわれる。「旧記」ではこのことについて、「天文二年大内復銀山を取返して～略～此年寿亭博多より宗丹桂寿と云ものを伴い来り八月五日相談し銀と石と相雜ものを銀と云、を吹溶し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也」とある。『おべに孫右衛門えんき 一名 銀山旧記』(以下、「おべにえんき」という)では、「白銀吹き初め候事、天文二年八月十五日 九州博多より慶寿と申禪門參られ吹申候」という。慶寿については、先の『高野山淨心院往古旦家過去帳姓名録』に「出し土 慶寿 十五日」と記載があり、実在の可能性がある。

灰吹法の伝来元である朝鮮ではそれ以前に、銀産統制のもと民間で日本鉛を使った灰吹法による銀鉛石の製錬が行われており、その禁を犯した朝鮮人が処罰されたという。(『李朝実錄』)

博多の商人神屋寿禎は、大内氏の庇護の元で半島との交易を通じて技術の導入を試みたともいわれる。いずれにしても、灰吹法の導入によ

り石見銀山の産銀が飛躍的に伸張していくこととなつた。その例として、同じく『李朝実録』では、1538年、「倭人は銀だけを持ち他のものは持つてこない」という記載をはじめ、1542年「倭国で銀を造り始めて十年にもならないのに倭銀が我が國に流布し、既に賤物となつてゐる」とことや銀8万両の貿易を日本国王使僧安心が朝鮮に求めている記事を伝える。

中国においても、スペイン船、ポルトガル船によってもたらされる南米のボトシ銀山産の銀が流入する前に、福建のジャングクによって日本の銀が買い付けられたといわれている。

また、1552年フランシスコ=ザビエルがロドリゲス神父に当たる書簡には「カスチリア人はこの島を銀の島と呼んでいる」と紹介しており、日本の産銀の増大が知られる記事である。

(2) 争奪戦と徳川の掌握

石見銀山の争奪戦をめぐっては、これまで「旧記」の記載によるところが大きく、以下にその概略を述べる。享禄4(1531)年小笠原氏が支配。天文2(1533)年大内氏が奪回。天文6(1537)年に尼子晴久が銀山を攻略。天文8(1539)年に大内義隆が奪回する。翌、天文9(1540)年に小笠原氏が奪うが、実のところ享禄4(1531)年から永禄3(1560)年まで小笠原氏が支配。その後、毛利氏が銀山を取り、永禄4(1561)年に尼子氏が再び奪う。

また、「旧記」によるものではないが、弘治2(1556)年に毛利氏による銀山掌握、永禄元(1558)年尼子氏の銀山奪取、永禄5(1562)年毛利氏による奪回、という説が定着している。

この通説について、新たに原慶三氏は一次史料だけでなく二次的な史料も傍証として、先に挙げた「おべにえんき」の信憑性の高さを説いたうえで、明快に整理を行っている。

内容として、享禄4(1531)年、小笠原長徳が銀山周辺で軍事活動。天文2(1533)年灰吹法の開始、両大工(於紅を打果した吉田与三右衛門、吉田簾左衛門の二人)は山口にて「御

判」をうけ、官名を与えられる。与三右衛門が大蔵丞、又三郎(簾左衛門)は采女丞。

天文6(1537)年の尼子氏による銀山攻略、天文8(1539)年の大内奪回はなかったもので、天文9(1540)年的小笠原氏による奪取も、尼子氏による銀山攻撃である。この年はいわゆる安芸の吉田郡山合戦といわれる毛利攻めの年であつて、敗軍により大蔵丞のみが大工となる。

その後、尼子氏の銀山領有は謀反による大内自害に乗じた弘治2(1556)年から永禄5(1562)年まで、ということである。

毛利氏は温泉津を直轄地として、銀山を「温泉銀山」「銀山温泉津」と称した。また、幕府と朝廷に料所として寄進、朝廷に対して毎年上納を続けていたといふ。詳細な生産高は不明であるが、「銀山納所高辻」(『毛利家文書』)によれば、毛利氏直納分として1年間で都合3万3千貫あまりあったといふ。

本能寺の変の後、秀吉は毛利氏と和議を結んで、その後、文禄元(1592)年、慶長元(1596)年の朝鮮侵略に際して石見銀で大量の石州御公用銀を造り、その戦費としたといわれている。

関ヶ原の戦の後、石見銀山は徳川氏の管轄に置かれることとなり、荷分制と甲州流といわれる鉱山技術によって鉱山經營に長けた大久保長安による銀の増産が行われることとなった。

(3) 江戸期の石見銀山

銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎える。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は年3千600貫の銀を産したといふ。

銀山經營を支える仕組みとして、元禄年間(1688~1704年)頃より石見銀山領の村々のうち佐摩村を中心とした周辺の邇摩郡・安濃郡・邑智郡に銀山御園村32ヶ村が設定され、坑内の支柱(栗材)や精錬や坑内作業に必要な炭、繩、呪などを供出することが義務付けられた。それぞれの坑道の經營方法は慶長初期頃から奉行所(代官所)直営の御直山と、山師の請負山である自分山があった。御直山の經營は公費か

ら資金・資材が提供され、鉱石を一定の割合で公儀・山主・銀掘りに荷分けされるもので、その割合は時代により変遷があった。

寛永期以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになる。延宝年間(1673~1680年)になると産銀量は年間約4百貫に減り、幕末の安政6年には30貫と記録にあたる。

江戸期を通じて奉行・代官・預りは59人で、石見銀山附御料約4万8千石の統治と銀山の管理をおこなっている。

(4) 近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元に払い下げられ小規模な経営が続けられたが、明治5(1872)年の浜田沖地震で坑道はほとんど水没し、全山休山状態となった。明治19年合名会社藤田組が1鉱区の借区権を買取り、翌20年には全鉱区を買取り、仙ノ山南の銀山部(本谷鉱区)で採掘が開始された。この時から大森鉱山となり、鉱事務所を銀山部におき、24年からは邇摩町柑子谷の永久部(永久鉱区)に製錬所が建設された。28年には清水谷に収銀湿式法による新製錬所が建設され操業を始めたが、翌29年に良鉱が得られなかったことなどにより、休止することになった。開発の中心は永久部となり、同35年には発電所を建設、電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。

主要商品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り盛んをみた明治後期から大正初期には、柑子谷は一大鉱山町に発展した。大正6(1917)年の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、その上安価な外国産銅におされ、ついに大正12(1923)年6月に休山に追い込まれた。

昭和16(1941)年国の援助で再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、柑子谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、坑道も水没して再開発は断念され現在に至る。

第2節 石見銀山遺跡の概要

石見銀山遺跡は大田市大森町を中心に、周辺の仁摩町、温泉津町などを含めた広い範囲に分布し、特に銀山跡が存在する大森町には遺跡が集中している。遺跡は大きく銀山地区と、石見銀山や銀山御料に関する行政、通商の機能を有していた大森地区、および周辺に点在する石見銀山に密接に関わる関連地区からなり、生産遺跡を中心に、人々の生活や銀山の統治に係わる様々な遺跡から構成される。遺跡の年代が中世から近代まで約400年に及び、重層性、複合性をもつ遺跡の集合体であることが石見銀山遺跡の特徴のひとつとなっている。

(1) 銀山地区

銀を産出した鉱山跡と、銀生産に携わった多くの人々が居住し、生産と生活に係わる物資が多量に流通・消費された鉱山町遺跡である。

【生産遺跡】

探鉱・採鉱・製錬の遺跡。間歩分布調査では、露頭掘り跡が47か所、坑道跡526か所が確認されている。採鉱遺跡の分布は銀を中心とした福石鉱床と銀・銅のある永久鉱床のあり方と一致している。坑道掘りの代表的な遺跡として、国指定史跡の大久保間歩、釜屋間歩、本間歩、龍源寺間歩などがある。製錬の遺跡として、発掘調査で検出された石積みの水溜や溝などの選鉱に関連する遺構、炉跡・鉄鍋・石鉢などの精錬に関連する遺構がある。

近代の遺産としては、藤田組操業に伴った製錬所跡、トロッコ道、変電所跡などが知られている。

【生活遺跡】

仙ノ山一体に広い範囲で大小の平坦面(テラス)が認められ、そのほとんどが住居兼工房と推定されている。発掘・分布調査、文献等から石銀集落跡、柄畠谷集落跡、下河原集落跡、上市場集落跡、休谷集落跡などがあり、これ以外にも銀山七谷を中心に多くの集落跡が存在する。

【城館遺跡】

戦国期銀山争奪戦の拠点となった要害山に築かれた山吹城跡がある。仙ノ山の北西に谷を隔てて位置し、主要な郭は北西から南西にかけて伸びる尾根上に集中する。要害山の南東、休谷に面して大手があり、戦国期の毛利氏領有期には銀山管理の休役所が置かれ、現地には役所跡の長大な石垣が遺されている。

【支配関連遺跡】

戦国期の休役所跡は、江戸時代に初代銀山奉行となった大久保長安の奉行所となり、周辺には御銀蔵や吹屋などが所在したといわれる。江戸時代銀山には仙ノ山を取り囲むように柵列が築かれ、10か所の口番所が置かれ、発掘・分布調査によりそれぞれの番所の位置と藏泉寺口番所跡では柵列の遺構と推定される石列が確認されている。また、幕府直営の坑道の入口に置かれた四ツ留役所跡が龍源寺間歩坑口前の発掘調査で検出されている。

【信仰遺跡】

寺院が約70、境内をもつ神社が数か所あり、祠や石造物なども多数認められる。寺院は寺跡が確認できるものが20数か寺あり、由来は不明であるが地名として残っているもののが多数を占めている。石造物調査では龍源寺間歩上墓地や妙正寺墓地などにおいて墓標を中心とした石造物の分布調査や実測調査により、形態や葬地の変遷などが明らかにされている。柄畠谷に位置する佐尾亮山神社は、別当寺として神宮寺をもつ、神仏混淆の社殿・境内と神楽殿を有している。

【歴史的町並み】

山組頭、銀山附役人遺宅などが残る、銀山操業時以来の歴史を引き継ぐ町並みがある。

(2) 大森地区

近世初頭に銀山町を柵内、大森町を政治・経済の町として区分し、代官所、向陣屋など銀山御料の統治関連施設や郷宿、御用商人宅などがある。

【支配関連遺跡】

代官所跡には文化12年(1815)普請の表門と門長屋が現存している。代官所跡地南側の発掘調査では藏跡と推定される石列が検出されている。また周辺には手代・手付役宅があった向陣屋跡、馬場跡、御銀蔵跡、中間長屋跡などがある。

【歴史的町並み】

郷宿、地役人、町年寄、同心遺宅や寺社などが残る。銀山操業時以来の歴史を引き継ぐ町並みがある。町並みは街道に面して堀を建て主屋を奥まった場所に設けている武家屋敷と、街道に面して主屋、土蔵、廻を連ねる町屋が混在するのが特徴となっている。また信仰遺跡である寺院跡や墓地・供養塔などの石造物がある。

(3) 関連地区

大田市大森町に隣接する仁摩町、温泉津町には銀生産と物資の流通などにより結ばれた、関連する遺跡が存在する。

【城館遺跡】

山吹城跡周辺には数多くの山城があり、代表的な城跡として、矢滝城跡、矢苦城跡、石見城跡、鶴丸城跡、梅山城跡がある。このうち鶴丸城跡、梅山城跡は中世の港として繁栄した温泉津町の沖泊港入口に築かれた海城である。鶴丸城跡は築城の経緯が文献に記された城として知られ、元亀元(1570)年に毛利氏の命により、毛利水軍の拠点として築かれたといわれ、銃陣を敷くための三段の帯郭を備え、大手に樹形虎口を用いた繩張りに特徴がみられる。

【港湾遺跡】

戦国期から近世に銀鉱石の搬出や銀山への物資搬入港であった鞆ヶ浦、沖泊、古柳、温泉津、小浜などがある。鞆ヶ浦、沖泊には船を係留するための、海岸の岩盤を加工した「鼻ぐり岩」が多数残されている。

【支配関連遺跡】

江戸時代、国境や交通上・警備上の要衝地に配置された口番所、船表番所がある。詳細につ

いては不明である。

【交通遺跡】

銀山と流通上必要な地を結んだ街道がある。街道調査により、戦国期に銀鉱石を搬出した辆ヶ浦～銀山ルート、戦国期から近世に銀山の外港となった温泉津～西田～銀山ルート、近世に銀の大坂納めのために確立した大森～赤名～尾道ルートなどが明らかにされている。現地には街道跡とともに石畳や石段、道標などの遺構が存在することが確認されている。

【生産遺跡】銀山に鉄と鉄製品を供給した製鉄遺跡が数多く存在するが、大規模なものとして仁摩町宅野の達水鉄山所跡がある。銀山で使用される石造物や建築材となる石材を切り出した温泉津町福光の福光石切場跡がある。

【歴史的町並み】銀山への物資搬入の拠点港として港町、そして温泉町として栄えた歴史をもつ温泉津の町並みがある。廻船問屋遣宅や寺社、廻船問屋の廟式墓地などが点在している。

第3節 これまでの調査の概要と目的

石見銀山遺跡における発掘調査〔資料2〕が開始されたのは石見銀山遺跡総合整備計画策定事業に伴って、昭和58年度の蔵泉寺口番所跡推定地と代官所南地区の調査からであった。調査の目的としては「拠点地点での遺構確認と保存・整備の資料を得る」と報告にあるように、トレーニングによる調査であった。

調査の結果、蔵泉寺口番所跡では明確な遺構が確認されなかったという。また、代官所南地区では自然石積みと切石の石列等を検出、近世初頭から幕末に至る肥前陶磁、地元産陶器が出土した。現存する代官所長屋門とほぼ平行な位置関係にあることと、天保12（1841）年の代官所絵図から代官所に関連する建物跡と考えられている。

昭和58年以降、発掘調査は以降一時中断したが、昭和62年に町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定され、整備と活用事業に伴って調査が行われるようになった。

昭和63年度には龍源寺間歩遺跡が発掘され、龍源寺間歩の坑口付近の平坦地が調査されている。坑口東側の平坦地（I区）では、第1遺構面で建物跡2を確認、下層遺構面では建物跡1が確認された。第1遺構面では建物内にピットや炉跡状の土坑を検出、遺物ではノミなどの工具が出土したという。下層遺構面に至る厚さは40～50cmと報告されている。整地土中には陶磁器類、寛永通宝等が出土した。下層遺構面では炉状の集石遺構と18世紀代の陶磁器が出土、他に暗渠のような排水施設と、岩盤を穿った滝井状遺構とピットが検出されている。

坑口西側の平坦地（II区）では、第1遺構面で建物跡1、第2遺構面で建物跡1、第3遺構面では岩盤加工遺構が検出されている。時代はそれぞれ近代、江戸時代、及び戦国期の可能性、が指摘されている。〔資料2〕では地区名が、「龍源寺間歩四ツ留役所跡」に変更されている。



写真4 龍源寺間歩四ツ留役所跡

平成元年度は向陣屋跡、蔵泉寺口番所跡、植（上）市場集落跡の3カ所が調査されている。向陣屋跡では $1.5 \times 3.5m$ のトレーニングを2カ所設定、掘り下げをおこなっている。土層観察によって明褐色粘土質土が堅く締まることから、向陣屋に関連する遺構面と考えられている。また、多数出土したいぶし瓦のうち、本瓦葺の軒瓦が含まれていたことを根拠に、江戸時代の建物が存在していた可能性を指摘している。蔵泉寺口番所跡の調査では、II区において表土から30～50cmのところに方向の違う石列が検出された。北東～南西方向に伸びる石列は、銀山を開んだ

柵列と推定されている。遺物は16世紀中頃から19世紀代と幅広く、整地層中のものが多い。植（上）市場地区では戦国から明治までの3つの遺構面を確認、陶磁器の組成などから「生産よりも消費が中心となった商人の「町」に関連する遺跡」と推定されている。

平成2年度は元年度からの継続で藏泉寺口番所跡、そして新たに大龍寺谷地区と旧河島家敷地内が調査されている。藏泉寺口番所跡では、16世紀後半から19世紀前半の遺物が出土。16世紀第4四半期～17世紀前半の遺物から、番所が江戸時代に入り整地・構築されたことを裏付けると評価されている。



写真5 藏泉寺口番所跡

大龍寺谷地区では17世紀前半が中心で16世紀第3四半期の遺物が出土している。II区では塀と要石の出土から鉢夫が住んだ建物跡と推定されている。また、建物の規模や性格については不明な点が多いが、掘立柱建物跡という構造から鉱山労働者の住居と工房という性格を兼ね備えていた、とも推測されている。

旧河島家敷地内の調査は、「河島家」南側の空地を調査した。表土から50cmで遺構面を確認、井戸跡、石組みの柱穴状遺構、石列を検出した。近世初頭頃の出土遺物から、寛政の大火灾以前における江戸時代初頭の建物に関連する遺構、とされている。

平成3年度は下河原地区的調査が行われた。石銀地区的調査を除けば最も広く調査された例である。遺構は礎石立てによる間口の狭い建物跡で、炉跡などを伴い近世初頭の銀の精錬所とみられ、下河原吹屋跡とされた。また、からみ

の科学分析から、マンガンを多量に含有するものがあることが判明、造漆剤としてマンガンが使用されていたことが確認されている。



写真6 下河原地区

平成4年度は、山吹城下屋敷地区的調査が行われた。6カ所のトレンチによるもので、字限囲から、現存の高さ10mの長大な石垣及びその西側平坦地を休役所と推定、第2トレンチにて確認したところ、礎石を2つ確認。16世紀末から17世紀前半の遺物より、戦国期の休役所か、江戸時代大久保長安の奉行所と推定されている。また第5トレンチで炉跡2基を検出している。遺物は塗、分銅があり、17世紀初頭前後から17世紀前半という年代観が陶磁器から導かれている。



写真7 石銀千量敷地区

平成5年度からは仙ノ山山頂の石銀地区的調査が開始される。平成5～7年に調査された石銀千量敷南向山地区では、谷中央の遺跡を抉む形で建物跡2棟を確認。建物内に炉跡や選鉱施設とみられる土坑等を検出し、精錬に関する建物（吹屋）と推定。さらに下層には戦国期に遡る遺構の存在を明らかにした。

この石銀地区的調査を契機として、平成8年

度からは島根県教育委員会と大田市教育委員会との合同調査となり、発掘調査委員会が組織される。「採鉱と精錬の技術体系の解明を調査の柱とし、400年に及ぶ鉱山都市の実態を明らかとする」ことを目的に調査計画を立案、加えて科学的調査を発掘調査と同時並行で進めるという画期的な連携によって、石見銀山遺跡解明に向けての進展が図られた。



写真8 鉄鍋出土状況

平成8年度から石銀藤田地区の調査を開始、翌平成9年度には下層確認トレンチの戦国期の遺構面から鉄鍋が出土。科学的調査の結果、灰吹きに使用されたことが明らかとなった。石銀藤田地区の調査は平成10年度まで継続され、採掘から精錬までを行っていた状況や、遺構面が最も多いところで9面あることを確認。また、谷の中央に水路を伴った道が整備され、建物が連続して立ち並ぶ状況が判明した。



写真9 石銀藤田地区

発掘調査委員会では、仙ノ山一体の鉱山遺跡としての解明を進めるため、石銀地区以外の操業の拠点となつたいくつかの地区的うち、特に戦国期から開発が始まったといわれる出土谷地区、柄畠谷地区、於紅ヶ谷地区、竹田地区で調

査を行う必要性が指摘された。

これをうけて出土谷地区は平成9年度から、柄畠谷地区、於紅ヶ谷は平成10年度、竹田地区は平成11年度から調査に着手した。柄畠谷地区は、戦国期からの精錬工房が存在したことや「京町」、「京店」といった地名に表れる「町」が形成された地域である、とも指摘されてきた場所である。また、出土谷地区は、文献では戦国期に灰吹法を伝えた慶寿が居住し精錬をおこなった所という。立地からも鉱山の信仰の中枢である佐尾丸山神社に隣接することから、戦国期からの精錬の中心であったと考えられてきた。

調査の結果、柄畠谷地区では、16世紀から近世、近代に至るまで、盛り土のみでなく、削平によても整地が行われていることが判明し、検出された遺構は近代における製錬関係の施設であろうと推定された。また、戦国期の遺構が谷部で初めて確認されたことも成果となった。

出土谷地区では、おもに18世紀後半～19世紀半ば頃の製錬施設を伴う吹屋を検出し、下層確認のトレンチでは、戦国末に遡る遺物が出土した。その他、広い範囲で数度にわたって地形改変が行われていることも判明した。

今回報告する於紅ヶ谷地区は、このような経過によって、銀山400年の歴史にみられる銀生産の技術的な解明と、16世紀代の様相を確認する目的で調査を行ったものである。

第3章 調査の経過と概要

第1節 調査の経過

於紅ヶ谷地区は、露頭掘などの痕跡を留めていることや、「旧記」に記載されている於紅孫右衛門との関連から、石見銀山の中でも早い時期に開発が行われていたのではないかとの指摘を早くから発掘調査委員会にて受けた。

平成10年5月13、14日開催の第6回発掘調査委員会で、調査に着手することが了承された。

平成10年度はトレンチによる調査を行い調査期間は、約2ヶ月間であった。11月6日の第7回発掘調査委員会で指導を受け、引き続き調査を行うこととなった。11月29日には現地説明会を開催、約40人が訪れた。

平成11年度は、5月12日に開催された第8回発掘調査委員会にて調査計画が了承され、9月に調査に着手。調査区を拡張して、約3ヶ月間調査を実施した。この間、10月26日に奈良国立文化財研究所・小池伸彦主任研究官、田中義昭委員から指導を受けた。また11月12日開催の第9回発掘調査委員会で各委員から現地にて指導を受けた。現地説明会は、11月23日に開催。約60人が訪れた。

平成12年度は、5月1日開催の第10回発掘調査委員会で調査計画を了承され、調査に着手、漸次調査を実施し、12月まで行った。



写真11 現地説明会（平成11年度）

調査指導は7月27~29日に千葉大学玉井哲雄教授、8月10日に大田市伝建審議会委員・細見敬三氏より建築史的な見地から指導を受ける。

8月7・8日には田中義昭委員、奈良国立文化財研究所・小池伸彦主任研究官。9月27日には奈良国立文化財研究所・村上隆主任研究官、岡山大学・高田潤教授。10月25日には、田中義昭委員、鳥根県埋蔵文化財調査センター松本岩雄課長より指導を受ける。9月7日には中国社会科学院考古学研究所・劉慶柱所長以下6名が視察に訪れた。現地説明会は11月11日に開催、約50人の参加があった。

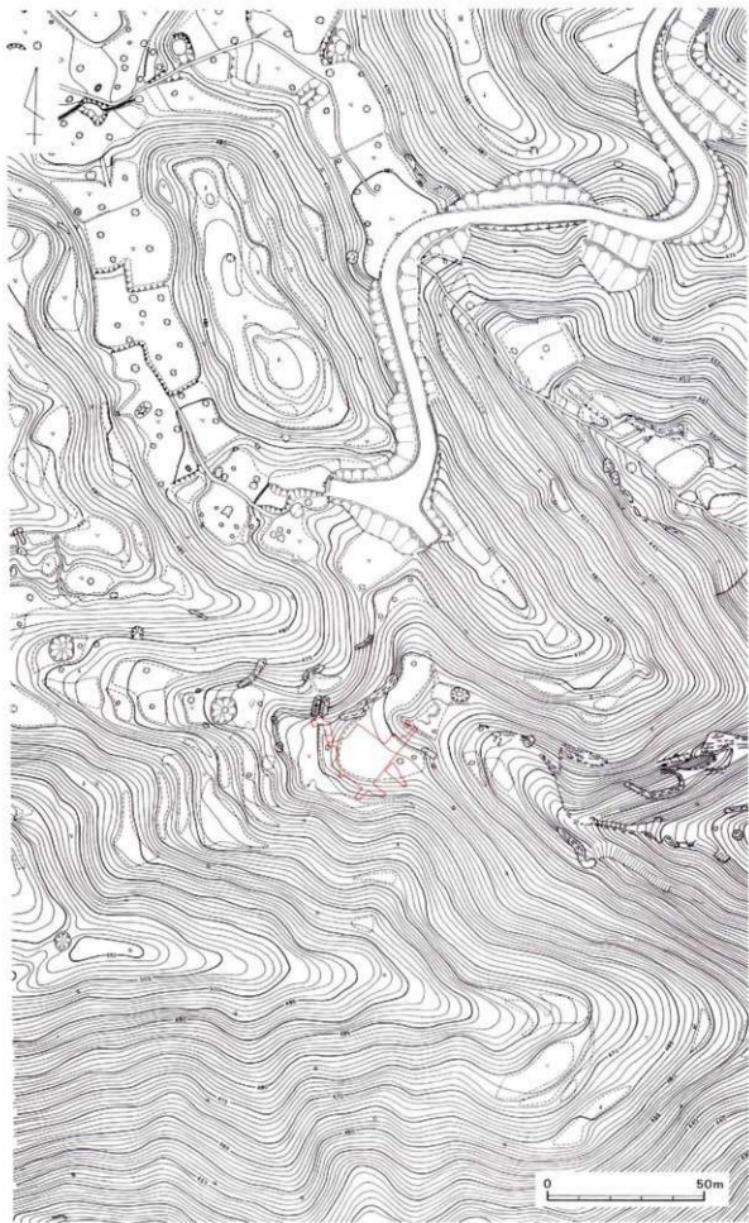
11月2日には第11回発掘調査委員会が開催され、調査状況を報告。調査の今後の方向について指導を受ける。また、12月22日には広島大学河瀬正利教授から製鉄遺構との比較などについて調査指導を受けた。

他に遺物関連の調査として10月15~17日には有田町歴史民俗資料館村上伸之氏により、肥前系の出土陶磁器について分類整理などを含めた指導、11月13日には広島県立美術館村上勇学芸課長から中国・朝鮮の陶磁器について指導を受けた。

12月7日には小泉和子氏から生活関連の装身具や青銅製品などの遺物について、1月24日には神戸市立博物館岡泰正学芸員からガラス製品についての指導を受けた。



写真10 調査委員会（平成11年度）



第3図 於紅ヶ谷地区調査区配置図 ($S = 1/1,500$)

第2節 平成10年度の調査

於紅ヶ谷地区的調査地点は、標高450~460mで、仙ノ山山頂から南東方向に下った谷部、通称「於紅ヶ谷」の中程に位置している。この於紅ヶ谷は通称「本谷」から約400mの延長があり、調査地点手前で北西方向に二つに分岐、距離約100mで石銀千疊敷地区に至る。



写真12 上空から見た於紅ヶ谷地区

調査前の現況は竹林で、それを除くと約20m四方の平坦面が現れ、平坦面上にいくつかのマウンド状の高まりが観察された。また、円形や長楕円形をした深さ約1mの窪みなどが確認されていた。

平成10年度の調査は、トレンチを中心に掘り下げを行った。トレンチの設定箇所は、道の所在を確かめるため、座標軸に沿って 2×4 mの規模で調査区中央に配置した。(H10 第1トレンチ) これは、石銀蘿田地区での成果によって、道に面して建物が建てられていること、道が谷の中央を通過して、建物配置の基準となっていることを勘案したものである。

掘り下げの結果、表土直下から部分的に表土上面に至る層位で石列を検出した。周辺の地形から、現況の道に伴うものと考え、石列を土手状に残した状態で、さらに下層を掘り下げた。掘り下げの結果、表土下約50cmのところで、目の細かなユリカス様の土層を確認、それを除去したところ、黄褐色～茶褐色粘質土の土間面を確認、建物跡が存在していることを想定した。次に、建物跡の把握のため、他にもトレンチを設定し掘り下げを行う。最初に設定したトレンチの東側に4.5m四方のトレンチ(H10 第2ト

レンチ)、南側には 7×2 m、 2.5×2 mの二つを設定し掘り下げた。

検出された石列は石の大きさが異なってはいたが、南側のトレンチを北東から南西に通過し、道であることが想定された。東側のトレンチでは、約2m間隔で北東から南西方向に並ぶ礫石を3つ検出し、建物跡があることを確認した。建物跡までに至る層位は、表土、縮まりのない黄色土、暗褐色土、目の細かい赤灰色粘質土(ユリカス土)などである。遺物の詳細は以下の通りである。(P.L. 25)

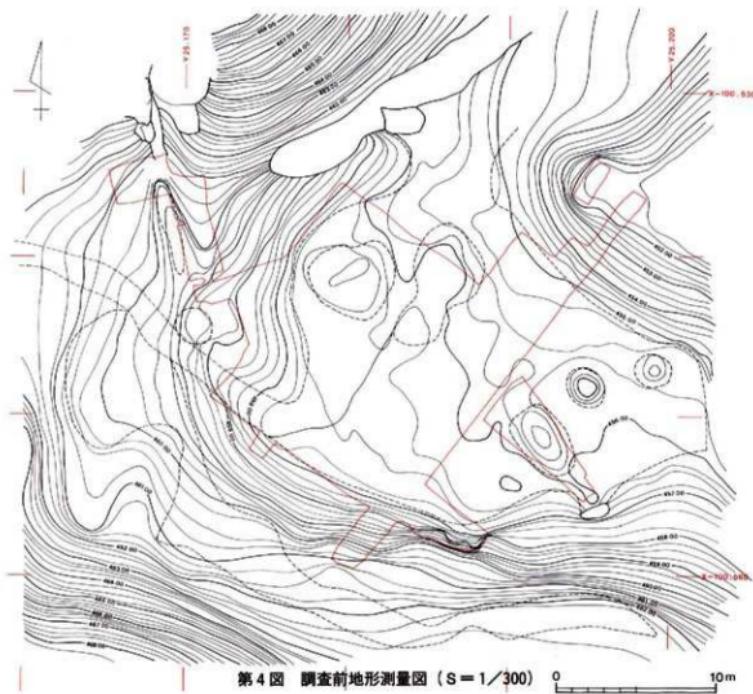
H10第2トレンチからは石見焼、備前、肥前系磁器、青花が計22点出土している。割合は石見焼55%、備前9%、肥前系磁器5%、青花23%である。石見焼(80)は瓶類の破片で、1個体分である。なお、石見焼の編年はまだ確立していないが、釉が緑灰色であり、19世紀代と考えられる(注1)。土師器(81)は、厚手である。82は備前、83は青花である。肥前系磁器93は口縁部に鉄釉が施された皿で、33と同一個体の可能性もある。(表6)

第3節 平成11年度の調査

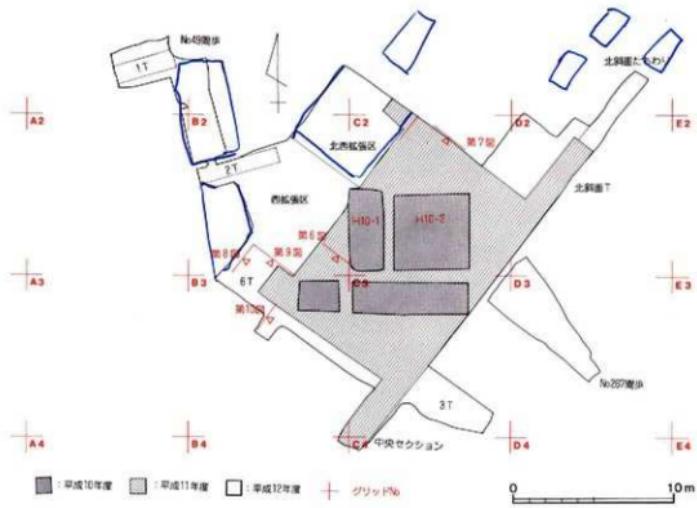
平成11年度は、建物跡に合致するように調査区を設定、面的に掘り下げ、建物跡の内容を明らかにすることを目的として調査を行った。

設定の調査区は、北東方向を主軸として南西方向に対して $10m \times 10m$ である。掘り下げの方法は、前年度設定のトレンチの軸線を土層観察用の畦として残し、層序毎に除去するという手順で行うこととした。調査区北東隅で、いわゆる選鉱スクリーンが円形に堆積した状態で検出された。表土直下であったので、下層の遺構面に関連するものとして除去は行わなかった。

道と思われていた石列は、拡張した部分には認められず、可能性として径4m、高さ1m程のマウンド状に形成された廃棄土の縁辺に位置していた石とも考えられた。道跡としては、現状の道として機能していたと考えられる幅約1m程の固く縮まった部分が検出され、これもい



第4図 調査前地形測量図 ($S = 1/300$)



第5図 年次別調査範囲図 ($S = 1/300$)

くつかあるマウンドの縁辺を通過していることが明らかとなつた。

また、南西隅では礫の集中をみたが、同じく廃棄土の一部の可能性が考えられるものであつた。さらに、礫石と考えられていた石は土間面よりも浮いた状態のものがあつたり、1m程の転石であることが確認された。しかしながら、土間面には礫石となりうる他の石が検出されたので、畦を残したままで礫石のレベルまで掘り下げた。

結果的に礫石を中心に検出を試みることになり、土間面の精緻な検出作業は行っていない。したがって掘り下げた面には部分的に茶褐色土が検出された場所もあり、また、黄色粘土を除去した段階で礫石が検出された箇所が混在することとなった。

礫石は南西側に3列で検出され、最も南側には6（A列）、中程に7ないし8（B列）、北東側に9（C列）の石を確認した。いずれも半間隔で並んでいた。この段階で、土層観察用の畦を完全に除去し、土間面での検出作業を行つた。土間面には黒色土（炭化物）の集中する箇所、また粒子の非常に細かい黄色粘土が堆積する場所の他、拳大の礫が集中し、周辺に炭片が散乱する箇所、を確認した。

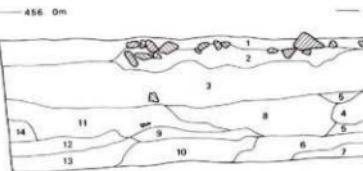
土間面上の遺構として、掘り下げを行つたものは、SK01である。遺構上面に1m大の転石がみられ、この石は周辺の土間面より高い位置での出土となっている。

礫石列C列の両端と中心から半間ないしは1間の間隔で調査区北東方向に礫石が広がることを確認した。また、SK01の周辺で、A～C列と方向が一致しない石列をも確認した。

平成11年度の調査では、調査区端を1m幅で、南西方向に5m、北東方向に3m拡張し、平坦面の構築方法などを確かめようとした。

斜面に対して設定された南西方向への拡張は、表土下に明褐色の礫混じり土の他に、固く締まった礫混じり黄色粘土が検出され、以下は岩盤であった。土層観察によって、礫混じり黄

色粘土は、基盤土で地山の一部ともみられるものであった。北東方向への拡張においては、ユリカスが堆積している状況が確認された。



- 1 明褐色土（表土、開墾土）
- 2 黒褐色土（やや締まる）
- 3 反応性土（白色小礫を多く含む、全体にやや固く締まる）
- 4 黑色炭化土
- 5 黒色土（粒子微少、炭化物多く含む）
- 6 黑色褐土（粒子微少、粘性あり）
- 7 黑色土（炭化物多く含む、やや締まる）
- 8 黑色土（砂粒を含む、粘性ややあり）
- 9 黑色粘土土（粒子微少）
- 10 黑色褐土（砂粒を含む）
- 11 黑色褐土（砂粒を含む、粘性ややあり）
- 12 黑色紅色粘土（粒子微少）
- 13 黑色紅色土（砂粒を多く含む、やや粗い）
- 14 黄褐色土（粒子微少、小礫を含む）

第6図 トレンチ平面・断面図 ($S = 1/30$)

第4節 平成12年度の調査

平成12年度の調査は、当初、次の計画で着手した。

- ①前年の調査区内の東、西両端に50～70cm幅のトレンチを設定、このトレンチを二つとも掘り下げ、併せて土層断面の検討を行い土間面の状況を解明する。
- ②建物南側の東西を、それぞれ約2m四方で拡張して、3列の礫石の範囲を確認する。
- ③調査区近辺に位置している二つの間歩の前をトレンチによって掘り下げ、間歩の採掘された時期を把握する。

以上の3点であった。

① (2本のトレンチによる掘り下げ)

西側のトレンチと付随する土層では、南西隅での粘土貼りの状況から土間面が最低でも上下2面以上あることが確認された。他に北西隅に検出されていた黄色粘土は堆積によるものであることや、二つの土間面より下は、部分的に厚い整地土に覆われていること、また、上層の土間面上に目が細かく均質な赤灰色粘質土が、ほぼ均等な割合で堆積していること、等が判明した。他にトレンチ掘り下げによって、下層の礎石や、炭化物の堆積した平面形が不定形を呈する土坑を検出した。

東側のトレンチと付随する土層（以下「中央セクション」という）の調査では、まず、前年に除去しなかった北東隅のズリ堆積が建物跡よりも新しいことを確認し、このズリ堆積を取り除いた。次に北東隅の中央セクションで3面の土間面を確認、遺物には16世紀末から17世紀中頃までの時期差が認められた。

② (建物跡南側の東西方向への拡張)

まず西側の拡張（以下「6T」という）では、石は検出されたものの、前年度検出の3列の礎石列に伴うとは断定しがたいものであった。また、西側の土間面を覆い尽くしていた土は、緩やかな傾斜を描いていることと、部分的に固く締まった土層があること、等が掘り下げ時の状況と土層断面の観察で明らかとなった。

東側の拡張（以下「3T」という）では、溝状遺構と、岩盤が検出され、東側でも傾斜変換点に近い部分は岩盤を加工して平坦面を造成していた可能性が考えられた。加えて、昨年度調査区南東隅では、堅緻な黄色粘土の地山や岩盤を掘り込んだピットを確認した。

③ (間歩前掘り下げ)

No267間歩では、調査前に確認されていた間歩前の長楕円形をした窓みから、開口している間歩に至るようトレンチを設定、掘り下げた。

No49間歩では、間歩の入口に近い箇所（以下「1T」という）と、間歩手前東側のズリ山（以下「2T」という）との2カ所に、約1m

幅のトレンチを任意で設定し、掘り下げた。

1Tでは、表土下30cmの厚さではズリの堆積が認められ、以下、溝状の窓みが検出された後、岩盤が露出するまで掘り下げた。2Tでは、全体を深さ約2m程掘り下げた。

その後、調査の方向として、より具体的な建物の性格や内容を窺い知る必要性を指摘され、新たに次の4点について調査を行った。

i : 調査区の西側への再拡張。

ii : 一部遺構の掘り下げ。

iii : 調査区内では、平坦面全体の理解を進めること、遺構精査を継続して実施。

iv : 斜面と石垣に対してトレンチを新たに設定。岩盤部分の草木と表土除去。

調査の結果、土間面の遺構として北側では、ユリカスを埋土とする素掘りの楕円形土坑（SK04）、石積み施設、並列するユリカス埋土の長方形プランの遺構（SK05）を検出した。

南側では、礎を集中させた箇所や、精査によって次第に茶褐色の整地土が取り除かれた段階で検出された平面形が円形の遺構（SK02、SK01）等を検出した。

また、建物の端部を明らかにするため、調査区南側全体を約50cmから1m拡張し、立石状の石列を検出した。

西側への再拡張では3m×5mの範囲で調査区を広げ、周辺の観察を試みた。

土間面は礎石列から西側に向けて約2m程広がりがあり、土間面上には、炭化物を内部に充填した平面形が円形の遺構（SX02）、等を検出した。

さらに西側には土間面とは性質の違う土が幅約2m認められ、斜面に繋がっていた。斜面には、基底に人頭大から50cmの大きさの石が設置され、斜面中程にも石が半ば埋め込まれている状態で検出された。

北西方向には約5×4mの範囲で掘り広げ、幅2m程の拳大から人頭大の礎を集中させた状況を検出した。

第4章 遺構と遺物

第1節 層序と上層の遺構

調査区を設定した平坦面上には、表面観察でも確認されるほどの、マウンド状の高まりが見られた。特に平坦面西側寄りに顕著で、斜面に至る傾斜変換点を中心に分布していた。

調査区を設定し掘り下げた結果、このマウンドの堆積状況を観察することが可能となった。第7図は調査区北西隅に位置していたマウンドである。表土を除いた層序は、上層に粒子が細かく締まりのない茶褐色土、薄い炭化物層を挟んで下層に白色の粒子を混入する暗褐色土（以下、「①層」という）が堆積していた。堆積状況から人為的に土を集中させたものと見られた。当初、坑道内部から掘り出された礫を堆積させたいわゆる「ズリ山」と考えられていたが、断面観察では礫の集中堆積は認められないものであった。暗褐色土の下は粒子が細かく堆積によって粘土質を呈する土層が見られた。いわゆる水性堆積によって形成された土層と判断され、この面から上に厚く前述の土層が堆積していた。

次に調査区に堆積した土層の層序について概述しておきたい。

第10図は調査区西側に設定したトレンチの土層図（以下、「西セクション」という）である。表土下には第7図にて①層とした層と同一の茶褐色層、その下に暗褐色土（以下、「②層」という）が堆積していた。この土層観察から、①層は、調査区西側にかけて厚く堆積していることが考えられた。

この西セクションでは、図中右側（方位北側）において、右斜め方向に互層状の堆積が観察された。暗褐色土層を黄茶色土層が挟んでいる状況で、その下層には、やや黄色を呈する土層が再びみられる。この互層堆積がみられる箇所は周辺より幾分か盛り上がっており、人為的な土砂の堆積として推察されよう。その後に、前述のマウンド状高まりと同じ①層や②層が堆

積しており、この土層についても人為的な要因の可能性が想定されるものである。性格としては、廃棄土の可能性を指摘しておきたい。

一方、南側斜面に係る西トレンチ南側の堆積状況はどうであろうか。表土下では、やや粘土質で暗褐色土を呈する層（以下「30層」と明褐色土の層（以下「31層」）が見られた。

これらの層と、前述①層との関係を示す箇所が平成11年度の拡張によって失われていて、図上では空白となっているが、補足図（第8図）の土層図に示したように、斜面から堆積してきた土層よりも①・②層が上位であることが明らかとなつた。

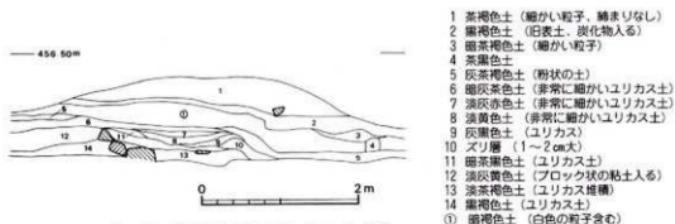
このことは、上層の遺跡とされてきた礫の集中する箇所の層序においても追認されそうである。第6図は、平成11年度の調査にて検出された上層の礫の平面図と土層図である。礫の集中は、概ね①層と見られる層中に位置している。ただし、表土を厚くみていることと、①層が②層直上の窪みに堆積した状態とに観察されたようである。しかし、上面の表土がこれらの層を覆っていることから上層という理解は問題ないと思われる。

また、調査区設定の関係で東西に係る土層図がないため、どの程度これらの層が平坦面に広がっていたのかは不確定である。

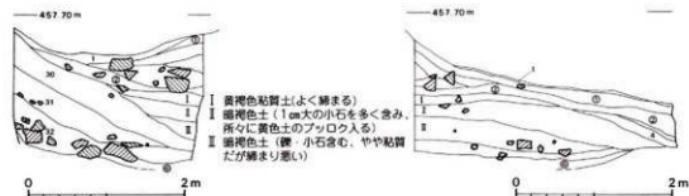
次に、①・②層より下層を観察してみたい。②層の直下では特徴的な層位が確認されている。灰赤褐色を呈した非常に目の細かい粘質土（以下、「⑥層」という）である。

この⑥層の範囲は、調査区北側にかけては石集中箇所の上面まで至り、南側でも補足図（第8・9図）にて観察される地点まで確認された。

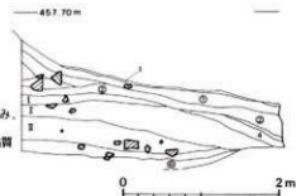
ここで注目されるのは、補足図に示したようすに南側斜面から至る30層、31層が⑥層よりも上に堆積し、⑥層と30・31層との間に、I・II・III層が確認されることである。



第7図 調査区内土層図1 (S = 1/60)



第8図 調査区内土層図2 (S = 1/60)



第9図 調査区内土層図3 (S = 1/60)



第10図 調査区内土層図4 (S = 1/60)

このⅠ・Ⅱ・Ⅲ層の状況は、断面観察時に平坦面を構築した痕跡と想定し、周辺を掘り下げて再確認したが、なだらかな傾斜を描く上、上面に締まりがなく面として捉えることに否定的な見解を与えた。

加えて、西側に拡張した時点（6T設定時点）では、面として捉えた掘り下げを行わなかったため、より具体的な性格は不明であるといわざるをえない。

さて、⑥層を除去したところ、やや締まる暗黃灰色土や炭化物層が見られた後、固く締まつた黃褐色ないしは黄色を呈する整地土が検出され、土間面と判断された。

⑥層の認められない南側では、黃灰色土や、よく締まつた黃灰色粘土質土があり、その下に黄色粘土の地山が検出された。

地山までの層序は南側の斜面でも確認しており、30・31層の下位には礫を多く混入している32層、よく締まつた黃褐色粘土質土の33層のうち、地山に至った。

ここまで説明してきた特徴的な土層の層序を、簡略に示すならば、以下のようになる。

下層から順に、黃色地山→黃色粘土整地層・黃色粘土質土・黃灰色土→⑥層→32・31・30層→Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層→②層→表土層、である。

この整地土から表土に至る層序について換言すると、次のこともいえよう。整地土の上に間層はあるが⑥層が堆積し、その上位に南側斜面に由来する30・31・32層が堆積。なだらかな傾斜を描くⅠ・Ⅱ・Ⅲ層の堆積が行われ、上位に①層が堆積した、ということである。

調査はこの後、下層確認と周辺の土層との対比を行った。下層確認については南側ですでに黄色の地山が検出されたので、反対の北側について、西トレント内に任意に深さ約2m掘り下げた。結果として、土間面がもう一面あった後、柔らかい礫を多く含んだ橙桃色土や橙黄色土が厚く堆積していた。その下層は、部分的に確認を行ったところ、やや粘質とした締まりの悪い茶褐色土が検出された。

下層確認の橙桃色土や橙黄色土中には、かわらけの小片のみであつたが、土間面を形成した土層中から粗製の中国陶磁器などが出土した。

他に⑥層下層から土間面にかけて唐津、中国製陶磁器、上層①②層からは伊万里が出土した。

第2節 建物跡

土間に伴う高さで、調査区南側にて規則的に配置された石が検出され、建物の礎石と判断された。

礎石が検出された面は、前述したが黄色粘土の土間面が検出されている箇所があるものの、部分的に茶褐色を呈した土間面より下の整地層とみられる土層が現れていた部分もあった。

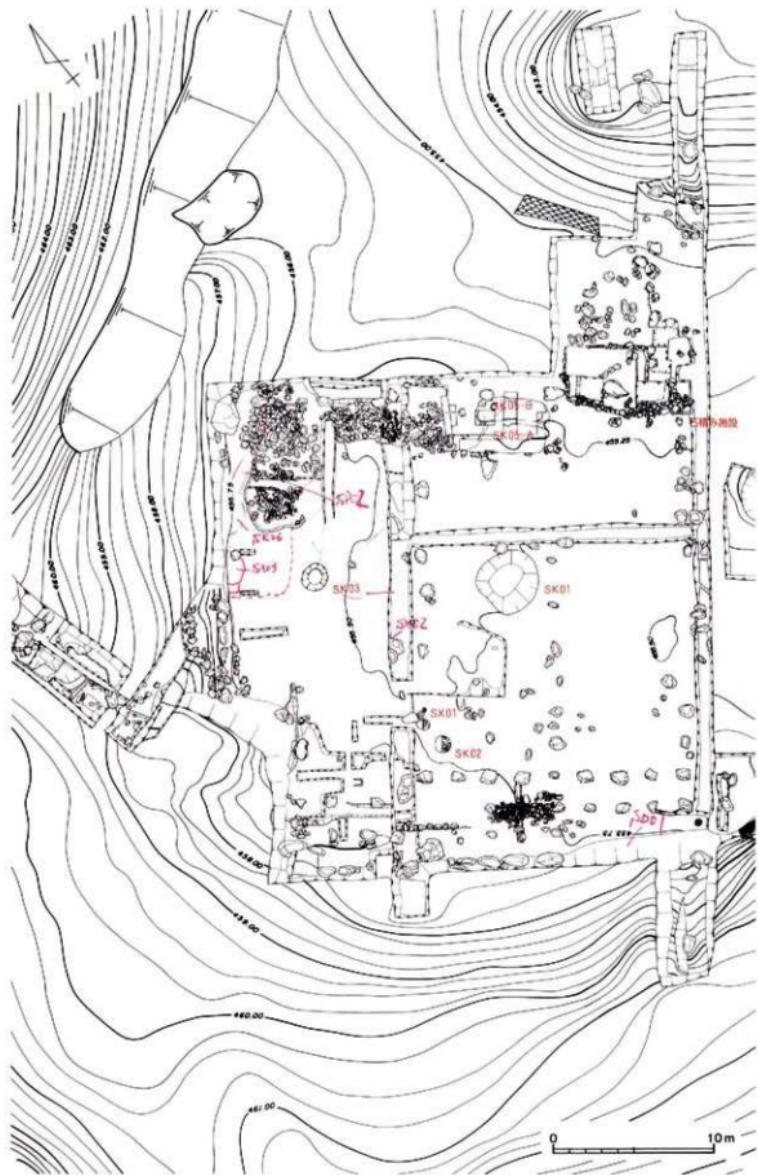
また、礎石の検出状況が、一概に土間面上もしくはそれに近い高さといつても、前節の層序でみたように、⑥層としたユリカス土の堆積する前後、斜面に由来する30・31・32層や、⑥層との間にあるⅠ・Ⅱ・Ⅲ層の堆積の前後など、時間的な問題と、その広がる範囲が建物の敷地を制約していた可能性が考えられる。よって、全ての礎石が同時期に設置されたとは断定できない。

前節の層位に対比してみて確定的である礎石は、最も西側南隅の二つで、ユリカス土を除去した段階で出土している。

礎石列は、第11図に示した平面図によるが、礎石間の距離の平均は、約100cmを測り、これを半間とみて、一間の柱間距離を推定すると、約200cmである。したがって、およそ6尺5寸の規格をもって構築されていたことが推定される。

礎石が直線的に配列された箇所をあげると、南側の3列を基本に北東方向にそれぞれ3列あり、中央のSK01の近辺の約1m間隔をとる3個の礎石列と、北側の約2m間隔の3個の列がある。

建物の構造等については今後の課題である。



第11図 造構配置図 (S = 1/150)

第3節 土間面上の遺構

【SK01】

土間面上の遺構としたが、すべてが土間面からの掘り込みとは断定できない。このSK01も、上層からの可能性が指摘される。

平面形は不定形であるが、検出された掘形から下がったところに梢円～隅丸長方形を呈する。埋土は、上層には白色粒子を混入する茶褐色土や暗褐色土がみられた。これらの色調や土質は前述①・②層と同一である。

以下、約2mまで掘り下げたが、確定的な底面を検出するにはいたらず、井戸跡の可能性が考えられた。

【SK02】

調査区南西、立石列から2mの地点に位置している。SKと表記したが、性格は不明である。平面形は径50cmの正円形、断面形は台形を呈し、検出面からの深さは最大で18cmである。埋土は上層に暗褐色土、以下、褐色土、黒茶褐色土。下層にかけて縛の他フイゴの羽口が出土した。

【SK03】

調査区西側の中程に位置する。⑥層を除いた段階で検出された。平面形は径80cmの円形、検出面からの深さ40cm、断面形は台形を呈する。埋土はいすれもいわゆるユリカス土で、やや目が粗く固く締まっていた。

【SK05】

SK05は、調査区の北東壁寄りに位置し、大型石積施設の北西側に隣接する、ユリカス土の堆積した土坑である。ほぼ長方形の平面プランを呈した遺構が二つ並列して検出された。便宜上、南西側をSK05-A、北東側をSK05-Bと呼ぶことにし、トレンチを入れて形状の把握などをおこなった。

SK05-Aは、短辺が0.85mを測る土坑である。長辺は北西側の縛混じりの溝状遺構に切られて不明であるが、少なくとも2.1mはあると考えられる。床面は平坦であり、ほぼ水平につくられる。長軸方向の南西側壁はほぼ直立する

が、短軸方向の南東側壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。壁の高さは南西側で19cmである。遺構内にはユリカス土の単純層で上位が黒色、下位が黒褐色のユリカスである。

SK05-Bは、長方形プランながらや丸みがあつて台形状になる土坑で、長辺は2.2m、短辺は0.6~0.7mである。床面はA同様ほぼ平坦でかつ水平である。壁は長軸方向の南西側が直立、北東側がやや傾斜する。短軸方向は両サイドとも内湾しながら立ち上がる。南西側での壁の高さは23cmである。北西側はAと同様北西側縛混じりの溝状遺構によって上部が切られている。また、南東隅だけは縁にL字形に赤黄褐色の粘土が貼られていた。内部はユリカス土の単純層で、上位が少し茶味のかかった黒色、下位が少し粘質性のある黒色のユリカスである。SK05-A・SK05-Bの切り合い関係は不明であり、出土遺物もない。

【SK01】

SK02から北西へ約1mの地点に位置する。平面形は径35cmのいびつな円形、断面形は台形、検出面からの深さは最大で15cmを測る。埋土中に通称「ネコ」と呼ばれている粘土板の破片が出土した。

【石積み施設】

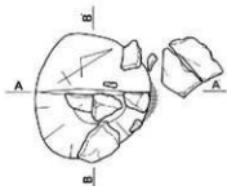
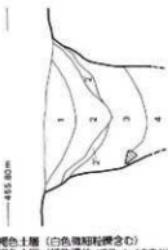
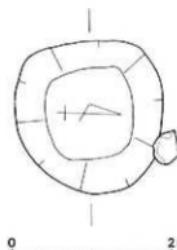
調査区北東で、北側への拡張部分付近に位置する。全掘していないので詳細は不明であるが、検出の状況としては以下の通りである。

まず石積み施設が構築され、その後、これを埋めてユリカスを埋土とするSK04や、遺構上面に礎石と見られる50cm大の石が置かれたと見られた。

また、面として掘り止めることはできなかつたが、中央セクションで確認したところ、表土下20cmに黄色粘土の層がみられ、新しい段階の土間面とも考えられた。この層からは比較的新しい遺物が出土している。

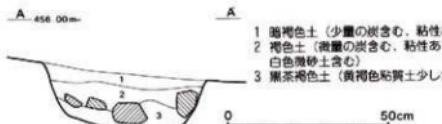
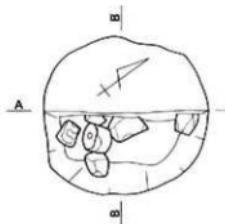
【石集積部分】

調査区北西方向に、検出の範囲において平面形「L」字状を呈する、石集中部分が検出され



第12図 SK 01 平面・土層図 ($S = 1/60$)

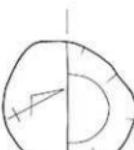
- 1 褐褐色土層 (白色腐殖質含む)
- 2 黑褐色土層 (褐色腐殖質含む、シダの実が多く述べ)
- 3 黑褐色土層 (褐色腐殖質あまり含まない)
- 4 黑褐色土層 (やや粘性あり、礫を少し含む)



第13図 SK 02 平面・土層図 ($S = 1/15$)

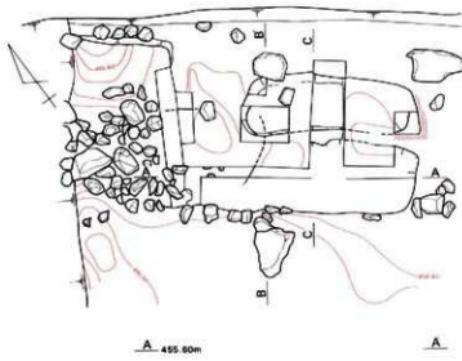
- 1 褐褐色土 (少量の炭化物、粘性あり)
- 2 黑褐色土 (微量の炭化物、粘性あり、白色微粉土含む)
- 3 黑茶褐色土 (黄褐色粘質土少しある)

第15図 SX 01 平面・土層図 ($S = 1/15$)



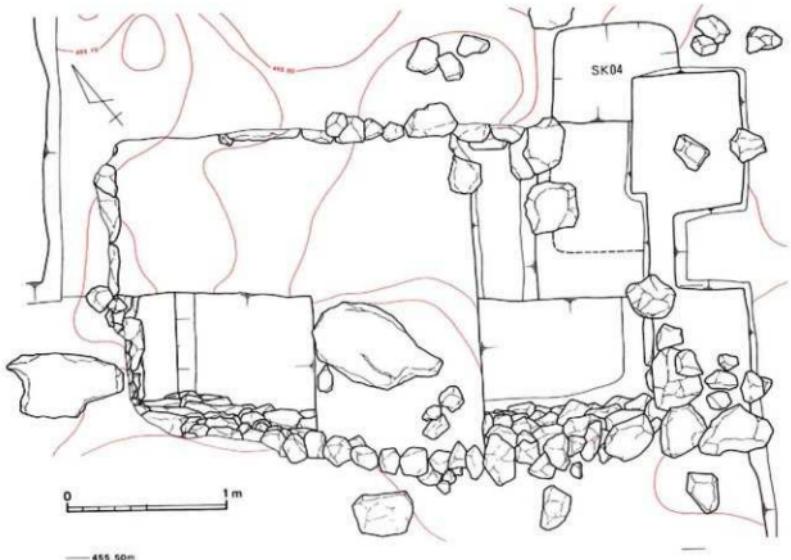
- 1 褐褐色土 (やや粘性有、若干子細かい)
- 2 黑褐色砂質土 (透水性有)
- 3 黑褐色砂質土 (透水性無)
- 4 深灰色粘質土 (よく縮まる)
- 5 黑灰色砂質土 (やく縮まる)
- 6 灰色褐角土 (ブロック状に崩入)
- 7 灰色砂質土 (やや縮まる)

第14図 SK 03 平面・土層図 ($S = 1/30$)

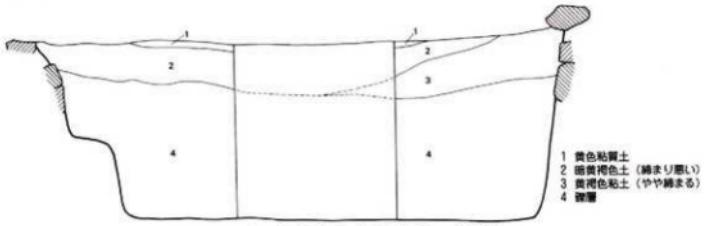


第16図 SK 05 平面・土層図 ($S = 1/60$)

- 1 黑色ユリカス (黒味が強い)
- 2 黑色ユリカス (少し茶味がある)
- 3 黑色ユリカス (粘土質を含む)
- 4 褐色粘質土 (ユリカスのきめの細いもの)
- 5 黑褐色ユリカス



— 455.50m —



第17図 石積み施設平面・土層図 ($S = 1/30$)



第18図 石集積部分実測図 ($S = 1/60$)

た。

北西方向から南東方向にかけては幅が約1mと狭く、石の密度がやや多い。この中程を西セクションに伴って石を除去し、断ち割りを行ったところ、深さ約1mを測り、溝状に窪むことが確認された。南西方向から北東方向にかけては幅約2mを測り、石はややまばらであったが、調査区端よりもさらに延びていくことも考えられた。西セクションの土層観察では⑥層が溝の上面に堆積していることがわかり、掘り下げによつても⑥層の下位には黄色～橙茶色を呈する粒子の細かい粘土（以下、「22層」という）が層を成して堆積していた。22層を除去したところで石群が検出された。⑥層と22層との間にはやや締まった暗灰褐色土が検出されたが、22層の上面を覆いつくしていない。遺物は石の間や上面を覆つた土中から出土した。

第4節 №267間歩前トレント

№267間歩は平坦面の南側にあり、背後の丘陵斜面に接している。平成9年度の間歩調査の際に確認された間歩で、岩塊の下に奥行き0.6m、幅0.9m、深さ0.4mほどの僅かな空隙が認められた。上方には№268間歩があり、これから排出されたとみられるズリが背後の斜面に堆積している。また、間歩前には長径4.5m、短径3.0m、深さ0.6mほどの楕円形の窪地があり、同じような窪地は東側にも2カ所並んで認められた（ただし、この二つの場合は径2.3～2.6mのほぼ正円形を呈する）。

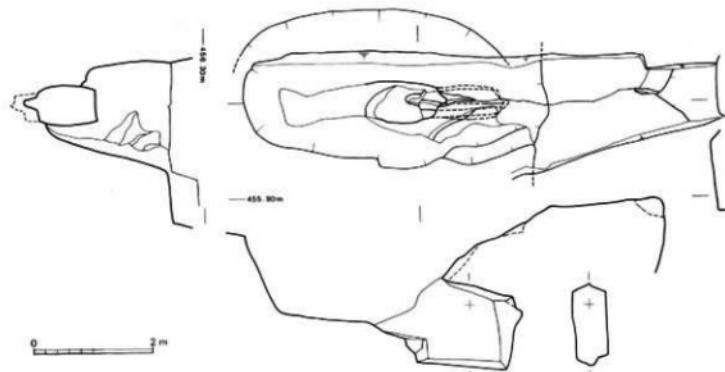
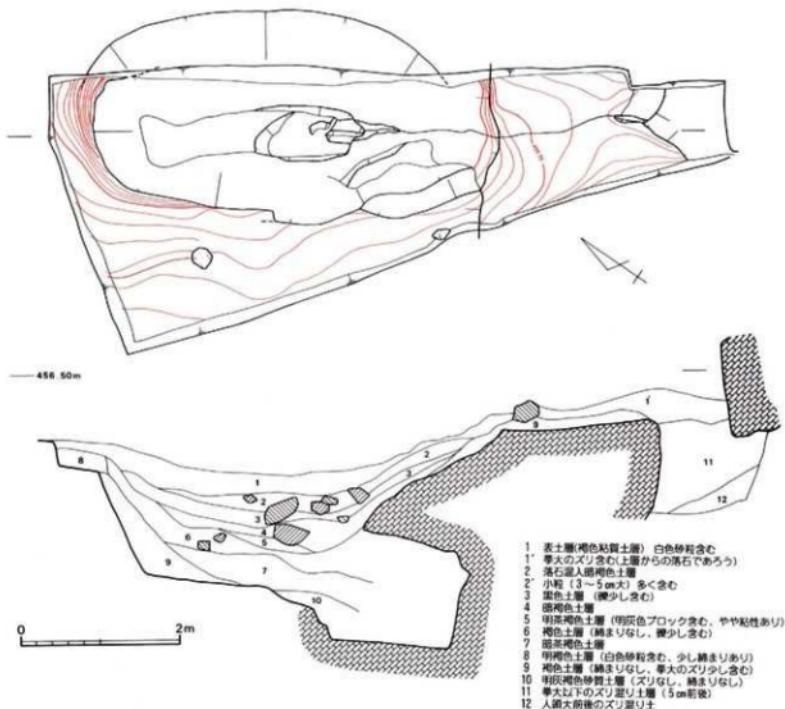
調査はこの窪地と№267間歩を結んだラインの西側を幅1mのトレントを設定し始めた。その結果、ちょうど窪みに対応するように新たな間歩が検出されたため、便宜上既知の間歩を267A間歩、新たな間歩を267B間歩と呼ぶとともに、トレントを西側に拡張して内部の調査に取りかかった。

267B間歩は、谷側に向かって下る岩盤斜面に穿たれた縦長の方形坑で、267A間歩とは4.1mほど離れて開口している。開口方向は北北西

の向きにあり、やや斜め方向に掘削されて途中で終わっている。規模は間口が縦0.95m、横0.65mあり、中ほどでは縦1.15m、横0.55mを測る。天井部からの奥行きは斜距離1.3m、水平距離1.2mあり、また一段低くなった床面からの奥行きは斜距離1.5m、水平距離1.48mである。床面は入り口で35cm下がり、約5度の角度でわずかに傾斜しながら奥に突き当たる。床面は平坦ではなく、中央に溝があって左右は段違いとなり、天井部も平坦ではなくやや屋根型に掘削され、頂部はさらに溝状に深く掘り込まれている。天井部と床面の溝は、鉱脈を追つた形跡と推定される。

壁面には掘削の痕跡が残つておらず、工具を当てた跡とみられる。両側面では工具がおよそ上方から下方に向かって当たられていることが分かる。間歩上部の岩盤は№267間歩から2.4mの間は平坦面が形成され、その標高は455.9mほどである。この平坦面は全体の敷地造成に合わせて削平された可能性が高い。また、岩盤表面には№267B間歩の開口方向と同じ向きに鉱脈筋が認められる。V字状に窪んだところは部分的に採鉱した痕跡かと考えられる。№267 AおよびBの鉱脈は上位の№268間歩のそれにつながっているものとみられる。

267B間歩は、開口部側の土層の観察から、白色砂粒を含みやや締まりのある暗褐色土層の上面から掘り込まれていることが確認された。したがって、この267B間歩は平坦面の遺構群のなかでもっとも新しい段階の遺構といえる。その掘形は楕円形で、規模は長径5.1m、短径2.3mであり、急角度で岩盤開口部に達しており、半裁した限りでは階段状の昇降口などは認められなかった。遺構検出面から開口部岩盤下端までの落差は1.9mであり、この間は厚く堆積した平坦面の造成土を掘り込んでいる。掘り込み部の土層の堆積状況は、上からおおむね表層土、落石混入暗褐色土、黒色土、暗褐色土、明茶褐色土、褐色土、暗茶褐色土、明灰褐色砂質土の順に堆積しており、途中の黒色土は旧表



第19図 No.267間歩トレンチ平面・土層図 ($S = 1/60 \cdot 1/80$)

土層ではないかとみられる。この前後には比較的の大小の礫を多く含んでいたが、この礫はズリ石と考えられ、斜面上部から流れ落ちたものとみられる。また、底部の基盤層はズリを少し含みやや締まりのあるマンガン沈着層の茶褐色土である。岩盤間歩内は、半分ほどが埋まつた状態で、ズリが堆積していた。

なお、No.267A間歩については、深さ1.2mほど掘り下げたが、上位の岩塊が崩落する危険性があったため、途中で調査を打ち切った。内部にはズリ混じり土がほほいっぽいに堆積しており、上位は拳大以下のズリが、また下位は人頭大のズリが多く含まれていた。

【No.267間歩前トレンチ出土遺物】

遺物は267B間歩の埋土から計17点が出土している。

267B間歩の埋土から出土する遺物は267A間歩の掘削から廃絶まで、平坦面の造成から廃絶あるいは平坦面使用時の遺物が混入する可能性がある。

遺物は土師器、古瀬戸、備前、肥前系磁器、青花が出土している。土師器18%、肥前系磁器24%、輸入陶磁器47%の割合である。7は土師器皿で、外面に煤が付着する。他に厚手の土師器皿もある。その他、古瀬戸香炉(112)と思われる破片がある。底部の破片で、鉄軸が流れ玉になっている。肥前系磁器(115)は折縁状の口縁部を持ち、口縁部には鉄軸の上に黄釉が施され、内面には青磁釉が施される。同一個体と思われる破片が平成11年の調査で出土している(116・117)。輸入陶磁器として、青花がある。青花碗(107)は見込みに白抜きの絵が描かれている。青花皿(108)は外反した口縁が端部で上方に伸び、内面には一条の界線が描かれている。

第5節 No.49間歩前トレンチ

No.49間歩は、調査区を設定した平坦面の西側斜面に位置している。調査前から坑口の岩盤が斜面下方から見て逆三角形状に露出した状態で

あった。開口部手前にはズリの堆積があるものの、上、中、下と3段に掘り進んだ形状が観察された。また、最上部は地表から溝状に探査していることや、坑口が矩形をしておらず、鉱脈に対して掘り進んだ形状を呈していた。したがって鉱脈が有力であったことと、早い段階から探査されていた可能性が考えられた。

【第1トレンチ】

トレンチは開口部の斜面の頂点から南方向にかけて幅1m、長さ3mにて設定。第1トレンチ(以下「1T」という)とした。

掘り下げ前の状況としては、開口部の前側が深さ約50cm程度窪んだ状況を呈し、南側にむけて高まっていた。最初に掘り除いた層は表土下もしくは表土中に堆積した拳大の角張ったレキの、いわゆるズリの堆積であった。断面で観察すると、開口部前の窪みには腐植土や炭化物を混入した状態のズリ層で、南側のズリ層とは堆積の時期に差があることが判明した。流れ込みの様子から、開口部前の窪みに伴うズリが相対的に新しいものであった。

ズリを除去した段階で、開口部に近いトレンチ北側で幅約60cm、深さ40cmの溝状の窪みを検出した。西方向から開口部の窪みに重なって伸びていたため、トレンチ東側の断面観察では、溝ではなく段の形状を呈した。

さらに掘り下げたところ、溝状の窪みの基盤となっていた褐色土はトレンチ内西側にかけて厚く、ほほ均質に堆積していた。土中からは絵唐津・輸入陶磁器などの出土を見た。

調査は以下、岩盤まで掘り下げた。トレンチ底面に検出された岩盤は、南側に高まりがあることと、岩盤には細脈を穿った痕跡が確認された。

土層観察の結果、岩盤に高まりを持つ部分の上に固く締まった暗褐色土や、粘質の黄褐色土が観察された。この、固く締まった上面を上場、岩盤の低い部分を底とした遺構が存在していた可能性が考えられた。

調査は周辺からのズリの崩落が多く、危険が

伴ったので、トレーニングの幅を2回拡張し、最終的にはズリ層の下の層を掘り残して崩落を止めた。

【第1トレンチ（1T）出土遺物】

出土遺物の詳細は以下の通りである。

1 T からは土師器、瀬戸美濃、肥前系陶磁器、青花、中国製白磁が出土している。土師器11%、瀬戸美濃5%、肥前系陶磁器42%、輸入陶磁器32%の割合である。41は青花碗で、畳付には釉がなく、見込みには淡いコバルトにより描かれ、底部には字款がある。その他、肥前系陶器として灰釉片口(103)、絵唐津大皿(102)や刷毛目(104)のある鉢がある。鉢は白色釉の上に茶褐色釉や灰釉が施されている。青花(100)は小碗の可能性があり、見込みに界線と草文が施されている。

【第2トレンチ】

1 Tと同方向のトレンチを開口部から東へ8 mのマウンド部分に、1 Tと同じく幅1 m、長さは南北方向へ5 mのトレンチを設定し掘り下げた。このトレンチを第2トレンチ（以下、「2 T」という）とした。

掘り下げ前の状況は、トレンチ最南部では円形の窪み、トレンチ中程に高まりがあり、北側では下りの斜面となっていた。

上層には、1 Tと同じくズリの堆積が見られた。以下、厚さ30~60cmの縛まりが悪く粒子が細かい明褐色土、やや粗い砂質のレキ混じり土などが堆積していた。トレンチ南側では黒色土、暗褐色土、炭化物の混入するズリ層などが、北側の土層より後に流入している状況が見られた。したがって表面観察から窺えたトレンチ南側の窪みは、トレンチの中では相対的に新しいと判断された。

このトレンチのねらいとして、表土下もしくは表土中に観察されるズリの堆積から、いわゆる「ズリ山」を掘り下げていくものとしていた。ところが、表土下のズリの堆積及び縮まりのない明褐色土等を除くと、非常に固く縮まった黒灰～黒色の砂質土や、同じく固く縮まった灰褐色

色土が検出された。灰褐色土は平らな上面をもち、確定はできないが建物や何らかの遺構が構築される平坦面となる可能性が考えられた。

【第2トレンチ出土遺物】

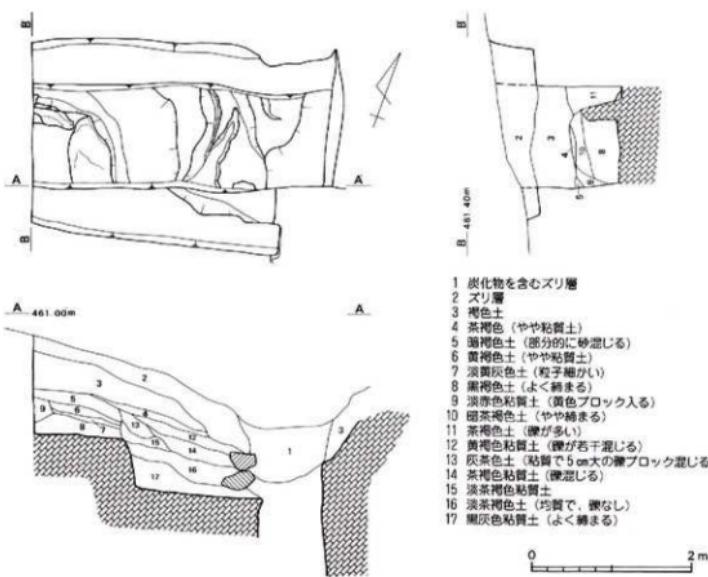
土師器、肥前系陶器、青花が出土している。肥前系陶器38.46%、輸入陶磁器46.15%の割合である。青花は景德鎮産ではない粗製品も含まれている。青花(86)は高台に砂が付着する。土師器(87)は厚手で口縁部が肥厚し、外反する。肥前系陶器(88・92)は内湾する口縁をもつ皿、(89)は陶胎の青花皿である。青花盤(94)は折縁型で、かなり厚手である。剣環は模式的で、その中の文様は不明であり、その間を青海波紋で埋め尽くす。口縁の文様帶の下には菊花紋が写実的に描かれ、口縁部は輪花状になる。青花盤(90)はコバルト淡く、模様もはっきりしない。

【1 T 拡張トレンチ】

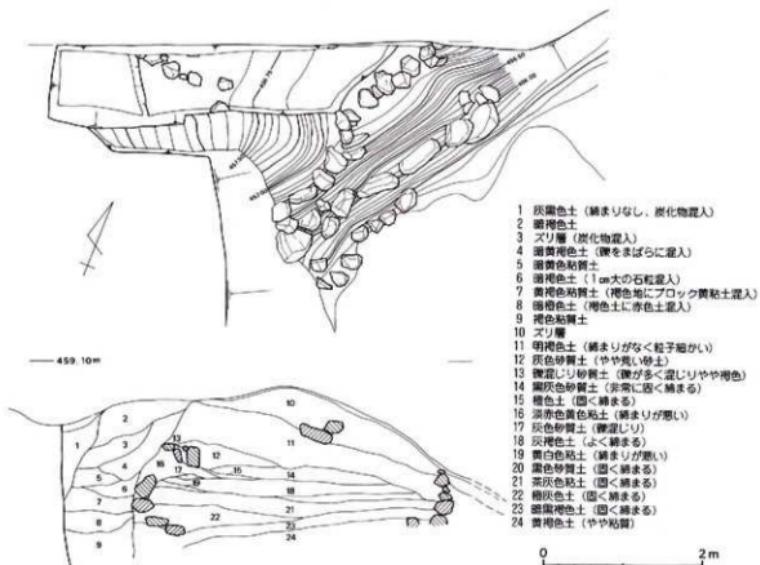
1 T、2 Tの調査の後、この二つのトレンチ相互の関係を確かめが必要となり、新たに2 Tに直角、1 Tの東側に至る長さ7 m、幅1 mのトレンチを設定。南北方向の堆積を確認するため、1 Tから東へ2.5 mの箇所に、トレンチ内を横断する形で駐車場にて掘り下げた。

上層ではズリの堆積が厚く見られた。しかし上層と下層のズリ層の間に、ズリを多く混入しているが、明黄褐色を呈する締まりの悪い層が介在していた。また、1Tに近い箇所の下層ズリは暗い色調を呈し、上層ズリとは分層された。また、下層のズリを除くと下位から岩盤が現れた。

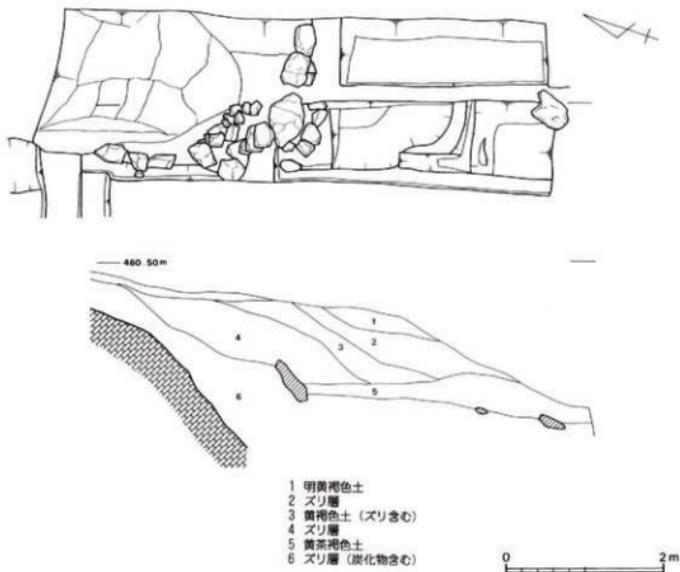
土層観察用の畦中には石積み状の部分が検出された。下層の暗い色調のズリがこの石で止まっていることから、ズリを留めるために設けられた石積みである可能性が考えられた。この石積みより東にはズリの下に、2Tでズリ下に確認された明褐色土が堆積しており、それを除くと明赤色の綺また層や黄褐色土、暗黃褐色土などが検出された。さらに掘り下げたところ、いくつかの整地面が形成されており、色調の違



第20図 No.49間歩トレンチ平面・土層図① ($S = 1/60$)



第21図 No.49間歩前トレンチ平面・土層図② ($S = 1/60$)



第22図 No.49間歩前トレンチ平面・土層図③ (S=1/60)

いはいくつかの堆積土や遺構が重複関係にあるためとみられた。

調査はズリの崩落防止とトレンチ内の精査のため、トレンチを横断していた畦を除去しトレンチの幅を2mに拡張して掘り下げた。

現在、このトレンチは来年度も調査は継続されるため調査途中であって、現時点で各層を完掘するに至っていないため、新旧の関係を明記するに止めておくこととした。

最も新しい層は開口部の崖みの掘り下げで確認された炭化物を混入するズリ層である。次にこの層に切られる形で暗黄褐色の整地面があり、明赤色土を基盤とする溝状の遺構、さらに2Tの南側で確認された掘り込みの順に古くなることが想定された。

第6節 調査区内出土の遺物

【陶磁器等】

1～6は土師器皿で、底部が確認できるものは全て糸切りである。1は幅1cmほどの粘土紐を渦巻き状に巻き底部を成形している。2は底部と体部に明瞭な境がある。この土器は黒褐色であり、他の土師器とは色調が違う。3の外面は凸凹である。底部と体部の境は明瞭である。4は上げ底になり、外面にタール状の付着物がある。5は立ち上がるが低く、平坦である。6は体部にかけて丸みをもつ。

8、9は瀬戸・美濃で、8は鉄釉天目で、口縁部がくびれる。9は灰釉折縁皿で、見込みには釉が残る。

10～31は肥前系陶器で、10～18は皿、19～21は碗、22、23は小壺、31は瓶である。10は口縁部が内湾し、濃灰緑色の釉に薬灰釉が被る。

11は濃灰緑色の釉で、口縁部は内湾する。12は外反する口縁部を持つ。13は基筒底で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁部に鉄釉が施される。14は見込みに鉄絵が施され、胎土目が4ヶ所残る。底部は削りでつくられる。15は削り高台で、3ヶ所に胎土目が残る。16は灰釉溝縁皿である。17は幅広の豊付を持ち、見込みに砂目が残る。18は型打ちの皿で、高台は円形であるが、内面は長梢円形に近い。19は調査区内では珍しく破片が大きく、全形が伺える。鉄釉と薬灰釉が掛け分けられる。体部には穴が空く。20は削り出し高台で、豊付は面をもつ。21の灰釉碗は丸みをもつ体部で、口縁部は垂直気味に立ち上がる。22の小坏は基筒底で、底部付近に砂が付着する。23は灰釉小坏で、糸切り底部である。24の蓋は口縁部が破損している。宝珠状のつまみを持ち、底部は糸切りであるが一部釉がかかる。25は大鉢で、内面に段があり、見込みには煤が付着する。外面には一部釉が施される。26の鉢は口縁部が肥厚し、内外面施釉される。27は片口で、口縁端部のみ露胎で、他は施釉されている。口縁端部は外側に屈曲する。28の壺は体部外面に2条の沈線があり、内面にたたきが残る。口縁端部は肥厚する。29は瓶の体部で、肩部には2条ずつの沈線が5段に施される。外面は茶褐色の釉の上に緑色の釉がかかる。内面はたたきの跡が残る。30は底部の破片で、二次的に火を受けている。外面上部に沈線がある。31も底部の破片で、上部には薬灰釉が施されている。

32、33は肥前系磁器である。32は白磁碗で、豊付けの幅は広く砂が付着する。33は型打ちされた皿で、口縁部は垂直に立ち上がり、端部には鉄釉が施される。見込みには菱形の模様がある。

34~44は青花で、皿(34~38)、碗(39、40)、小坏(42)、盤(43、44)がある。34は陶胎で、口縁端部は濃いコバルトにより界線が描かれている。35は基筒底になると思われる皿で、劍先文や草文が描かれている。陶胎である。36は薄

手であるが、豊付に多量の砂が付着する。淡いコバルトで区画された中に昆虫が描かれている。37は豊付には釉ではなく、見込みに草文と界線が施され、口縁端部の内外面に1条の界線がある。38は薄手の皿で、淡いコバルトでしっかりと描かれている。底部外面にもコバルトが見える。39は内面に2条の界線がある。見込みには釉剥ぎされ、陶胎である。40は磁器質な胎土で、厚手である。淡いコバルトで内外面模様があるが、はっきりしない。42は薄手で、線内をダミで埋め、描かれている。43の盤は折縁型で、かなり厚手である。劍環及びその中の折草紋は模式的になり、その間を青海波紋で埋め尽くす。44は盤の底部で、豊み付けには砂が多量に付着する。見込みには草文等が描かれている。

45は中国製の白磁皿で、口縁部が外反し、豊付に砂が付着する。

46は李朝の施釉陶器で、見込みには白色の目跡が2ヶ所、復元で7ヶ所残る。

47~50は備前焼と考えられる。47は瓶あるいは徳利の底部である。底部には○印のスタンプ文が2つある。48は花生で、口縁部を折り返している。口縁外面にはゴマ状の灰がかかる。内面は凸凹が顕著である。49の鉢は内傾する口縁部を持ち、口縁端部は段がある。50は播鉢の口縁部である、口縁外面は2条の凹線があり、内面には段がある。

51は陶器の鉢と思われる。器高は不明であるが、かなり口径が広く、深い。外面はナデによる凸凹が著しく、逆U字形に粘土紐を貼り付け、上側に円形浮文を貼り付け、下側は刺突文が施される。内外面とも施釉されていないが、高台から口縁部に向かって、釉が流れた跡が残る。

その他、瀬戸美濃では天目(121)・(122)、灰釉の六角壺(126)、表面に草文が描かれている志野がある。陶器(124)は基筒底で、内部の茶釉が施される。陶器(125)は一方に黒色釉が施され、端部はやや肥厚する。瓶・壺などの口縁部か。備前は大壺ではなく、播鉢(137)や瓶類

あるいは壺の底部の破片(142・143)が出土している。

肥前系陶器としては岸嶽系の藁灰釉が4点出土している。胎土目のある灰釉皿(128)、碗(136)が多く、刷毛目のある盤(134)、瓶(129・130)、火を二次的に受けた瓶(139)がある。132は18の口縁部と思われる。灰釉皿(127)の高台内には「+」の漆印が残る。肥前系磁器は小片が多く、119は115などの底部と考えられる。白磁皿(120)は33の接合はしないが同一個体の可能性もある。155は陶胎の染付で、色はくすんでいるがはっきりした色のコバルトで描かれている。口縁部は輪花状になる。

青花は皿・碗あるいは小壺が多いが、小片が多く、模様も不明なものが多い。158や171は青花盤の破片と思われる。五彩盤(172)、173は火を受け、釉の多くは飛んでいるが、赤色の界線が見える。朝鮮陶器(164)の胎土には黒色、白色の微砂粒が含まれている。

陶磁器以外の出土遺物には、金属製品、土製品、石製品、小石、カラミ、動物遺存体(貝)がある。

【鉄製品】

52~66は鉄製品である。52~55はタガネまたはノミ状の鉄器である。54は断面正方形の完存品である。全長9.3cm、頂部1.7cm四方、中程で1.5cm四方を測る。52・53・55は頂部側が欠損している可能性がある。断面は52・53が長方形、55が正方形であり、53の先端部は刃幅があつて平刀が考えられる。56は径3.9cm、孔径1.8cm、厚さ2.5mmの有孔円盤である。57は断面方形で現状では丸く屈曲している。58は幅1.0cm、厚み2.5mmの薄板が現状ではリング状を呈している。59~66は和釘と考えられる。いずれも断面方形で、4~7mm角の大きさである。59~64は頂部を残している。

67~70は銅製品である。67は簪で現存長13.7cmを測り、頂部を欠いている。68は把手金具で、折曲げの頂部が片側に寄っている。全長9.5cm、把手部幅9mm、同厚さ5.5mmあり、両端に

は径2.5mmの釘穴があく。69は保存状態の悪いキセルの雁首部であり、径1.2cmの先端は丸みを持ち、一ヵ所に径1mmの小孔が認められる。また、基部は断面八角形に成形されている。70は小柄の柄部で、現存長7.2cm、幅1.3cm、棟部厚4mmである。鉄芯部の周囲に厚さ1mmの銅板が貼られており、文様などは認められない。このほか無文鏡が出土している。

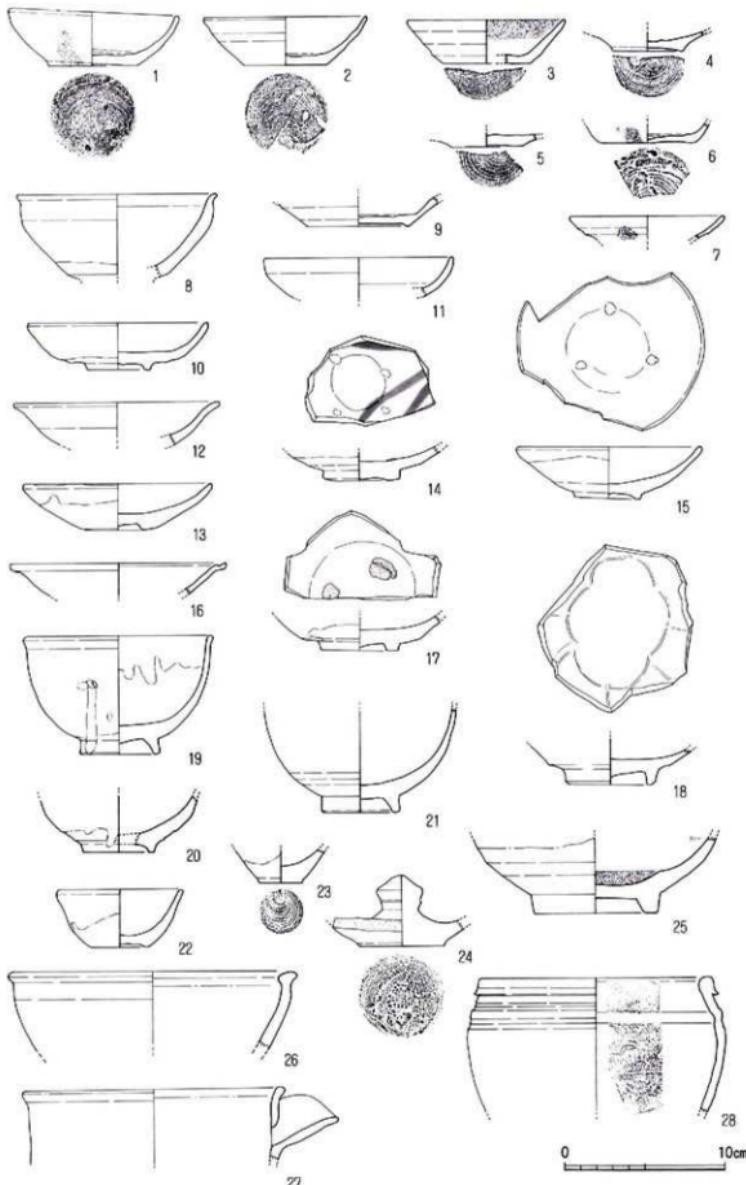
71~72は板状のカラミである。板状のカラミの出土量は極めて少ない。71は最大厚1.1cmで、一面は平滑面で放射状の細かな皺が観察できる。もう一面は平坦であるが表面はザラついている。断面には気泡状の空間ができている。72は最大厚1.0cmで、両面とも平坦でミミズ腫れ状の筋(鉄分か)が認められる。うち一面が端部がやや捲れ上がる。断面には火きり臼状に丸い凹みができる。

【土製品】

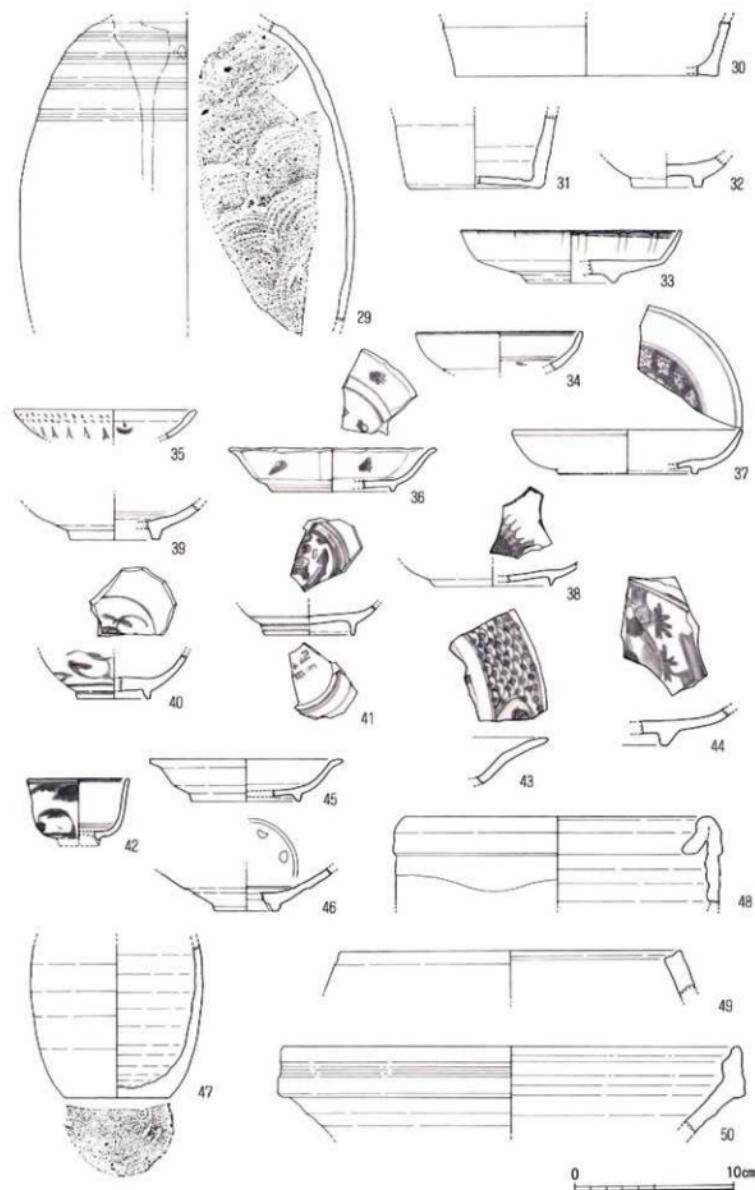
73~76は製鍊関係の土製品である。73~75は扁平な板状製品で、ネコと考えられるものである。73は現存長8.5cm、最大幅5.0cm、最大厚1.3cmで、内側に向かってやや渦曲し、下端には平坦面を有している。外面は赤褐色、内面は灰色を呈している。74は最大幅4cm、最大厚1.5cmで、内面は表面が溶解ガラス化して黒灰色ないし濃い紫茶褐色を呈している。75はコーナー端部の小片で、厚さは0.8cmである。また、おなじネコと考えられる破片で写真のみ掲載したものは現存長4.1cm、最大幅4.9cm、最大厚1.1cmを測り、外面が赤褐色、内面が薄灰色を呈している(P.L.23~29)。76は断面方形の吹子羽口であり、中央には断面円形の送風孔が空いている。送風孔は元から6.5cmのところまでは円錐状を呈している。外周のうち一側縁部が比較的よく被熱している。

【石製品】

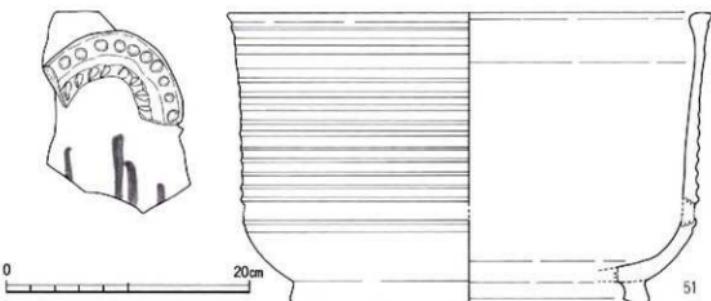
77~78は石製品である。77は砥石で、使用頻度に差があるが、両平坦面と長辺側の両側面の合わせて4面が使用されている。そのうち3面と短辺側の一方の面の合わせて4面には筋状の



第23図 於紅ヶ谷地区出土遺物(1) ($S = 1/3$)



第24図 於紅ヶ谷地区出土遺物(2) (S = 1/3)



第25図 於紅ヶ谷地区出土遺物（3）（S = 1/4）

擦痕が認められる。これは砥石を成形した際の切り出しの痕跡ではないかとみられる。石材は凝灰質砂岩である。78は石臼であり、把手部を作り。最大径20.3cm、高さ8.8cm、中央孔径2.2cmを測る。把手基部は下辺に接して菱形座を作り出し、一辺2.1cm、奥行き4.0cmの方形の孔をやや角度をつけて空ける。両面とも周囲に2.0～2.8cm幅の平坦面を設けたうえで中央部を掘り鉢状に窪ませる。中央の孔は両側から穿孔させていている。外周面は丁寧に平滑に仕上げられるが、両面の窪みは粗い成形で、刃幅1.4cmほどの平ノミの加工痕跡を残している。石材は白灰色を呈した凝灰岩である。

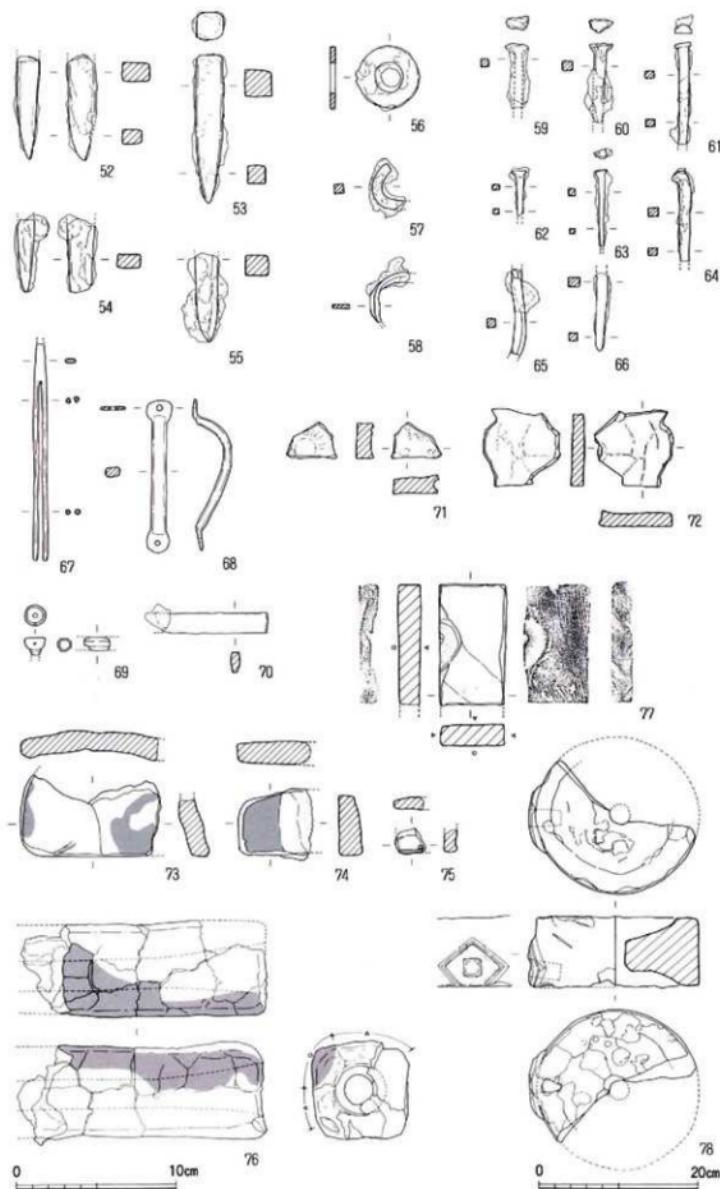
このほかの遺物には、やや扁平で丸みのある小石が20点ほど出土している（P.L. 23）。長さは最大17.7mm、最小26.8mm、平均22.1mm、厚さは最大4mm、最小10mm、平均6.8mm、重さは最大2.08g、最小6.61g、平均4.3gである。用途は不明であるが、中には碁石として使用されたものがあるかもしれない。石質は流紋岩もしくは安山岩、溶結凝灰岩と考えられる。また、現存長11cm、最大幅9cmはある大型の貝が出土している（P.L. 23）。

【ガラス製品】

調査区南東の礎石列の中間付近で、茶褐色の整地層と見られる土層から簪とみられるガラス製品1点が出土した。靈芝状で、全長は3.1cm、傘部分の直径は1.1cmを測る。色調は乳青色～青緑色を呈する。



写真13 ガラス簪



第26図 於紅ヶ谷地区出土遺物（4）（鉄製品・青銅製品・からみ・土製品・石製品）（S=1/3、27のみ1/6）

登録番号	実物番号	出 土 地 点	種 別	器 様	法 量 (cm)			色 調	成形・調整・文様	備 考
					口径	器高	底径			
1	10	C3-a	土器部	皿	10.3	3.6~3.7	5.5	黄褐色	口縁部にタール状付着物 底部系切り	灯明皿
2	11	C3-a(褐色土)C2-c C2-d(褐色土)	土器部	皿	10.0	3.0	5.1	黒褐色	底部系切り	反転復元
3	7	土器部	皿	(9.8)	2.8	5.4	灰褐色	口縁部にすす付着 底部 系切り	反転復元 灯明皿	
4	2	C3-c	土器部	皿		(4.4)	淡黃白色	タール状付着物 底部系切り	反転復元	
5	8	土器部	皿			(4.4)	黄褐色	すす付着 底部系切り	反転復元	
6	5	第1次リ山東	土器部	皿			黄褐色	内外面にすす付着	反転復元	灯明皿
7	4	267B19号多再発跡上層 上段	土器部	皿	(9.6)		淡黄褐色	外側にすす付着	反転復元	
8	29	第1トレンチ東リ山東	漬口・美濃	灰釉天日瓶	(12.2)			胎上:白黄色 輪:茶褐色~ 青褐色		大第3-4段階 反転復元 大第3-4段階 反転復元 折縫目
9	19	南西脇禮賀	漬口・美濃	灰釉皿		(6.2)		胎上:白黄色 輪:灰褐色	底部内面には釉が残る	大第3-4段階 反転復元 大第3-4段階 反転復元
10	24	北たちわり土中	肥前系陶器	灰釉皿	(11.0)	2.9	3.9	胎上:灰褐色 輪:濃青灰色 胎上:濃青灰色 輪:濃青色	削り高台	
11	21	第2道構面土上	肥前系陶器	灰釉皿	(11.6)			胎上:茶褐色 輪:灰褐色	口縁部は内側赤味に立ち がる	反転復元
12	28	第1トレンチ第1下段	肥前系陶器	灰釉皿	(12.6)			胎上:灰褐色 輪:灰褐色	口縁部外反する	反転復元
13	17	C3-c	肥前系陶器	灰釉皿	(11.6)	2.9	3.0	胎上:淡赤褐色 輪:緑色 胎上:緑色 輪:赤褐色	胎土目 番号記	
14	16	C2-a	肥前系陶器	灰釉皿		4.7		(外)淡灰褐色~淡黃褐色	胎土目 番号記	
15	18	西トレンチ中	肥前系陶器	灰釉皿	11.5	3.3	4.1	胎上:淡灰褐色 輪:淡綠色 胎上:灰褐色 濃赤褐色	胎土目	
16	30	第1道構面土上	肥前系陶器	灰釉皿	(13.4)			淡灰色	溝縫目	反転復元
17	22	西北松原区	肥前系陶器	灰釉皿		4.7		胎上:淡灰褐色 輪:淡綠色 胎上:灰褐色 濃赤褐色	砂目	
18	60	南隅(胎上より上層~暗 褐色土)	肥前系陶器	灰釉皿		5.0		胎上:灰褐色 輪:淡灰色	見込み格円形で花弁「蟹 打ち」	
19	36	C3-a	肥前系陶器	灰釉皿	(11.8)	7.35	5.1	胎上:灰褐色 輪:黒~ 茶褐色 輪:茶褐色 濃青色	茶褐色~灰褐色	鉄軸・無軸の部分
20	57	石垣崩落後客土	肥前系陶器	灰釉皿		(4.4)		胎上:濃青色 輪:濃 青色~青白色		反転復元
21	27	C2-a	肥前系陶器	灰釉皿		(4.5)		淡青褐色		反転復元
22	14	表鉢	肥前系陶器	灰釉小坪	7.6	3.6	3.5	灰褐色	甚苟底、底部に妙付着	反転復元
23	23	石垣上前方落土中	肥前系陶器	灰釉小坪		(2.7)		胎上:淡灰褐色 輪:淡灰 褐色	底部系切り 底部露胎	
24	13	C2-b	肥前系陶器	灰釉蓋		5.2		胎上:淡灰褐色 輪:淡灰 褐色	底面系切り	
25	15	B2-d	肥前系陶器	大鉢		7.4		胎上:赤黄褐色 輪:白色 胎上:淡灰褐色 輪:灰褐色	刷毛目 内面底部にすす 付着	反転復元
26	33	第2号	肥前系陶器	灰釉鉢	(18.0)			胎上:淡灰褐色 輪:灰褐色	口縁部が厚する	反転復元
27	44	C3-a(褐色土)	肥前系陶器	片口	(16.4)			淡灰褐色		反転復元
28	58	(昭和初期粘質土)	肥前系陶器	甌	(14.4)			淡茶褐色	外側に2条の沈線	反転復元
29	12	B3-b 南隅石列石数上 由 石列石列石数第2面	肥前系陶器	灰釉瓶				(外)茶色 (内)灰褐色	5条の沈線	
30	1	北たちわり土層	肥前系陶器	甌		(16.4)		胎上:灰褐色 輪:黄褐色 (外)茶色 (内)淡青色	内外面施釉 二次焼成	反転復元
31	6	中央セクション北	肥前系陶器	灰釉瓶		(8.1)		胎上:赤黄褐色 輪:白色 (外)明茶褐色 (内)淡青		反転復元
32	26	西トレンチ表土	肥前系陶器	白磁碗		4.3		胎上:淡灰白色 輪:淡灰 褐色		
33	64	西北松原区上層~下層	肥前系陶器	皿	(13.8)	(3.3)	(5.3)	胎上:白色 輪:青白色 胎上:白色 輪:青白色	達付着 口さび	反転復元
34	35	西脇礼賀上層~ゆりかわ 土まで	青花	碗	(10.4)			胎上:淡灰褐色 輪:淡乳 褐色	粗製品	反転復元
35	39	B2-d	青花	皿	(10.4)			胎上:白色 輪:淡灰褐色	二次焼成	反転復元
36	40	C2-c	青花	皿	(12.0)		(7.5)	淡灰白色	輪花口縁	反転復元
37	32	B3-d	青花	皿	(14.4)	2.8	(8.6)	白色	画面に津付着	反転復元
38	41	井戸頭 既付着	青花	皿		(7.3)		胎上:白色 輪:透明輪 胎上:淡灰褐色 輪:乳白 胎上:淡褐色		反転復元
39	31	西北松原区下層	青花	碗		(5.6)		胎上:白色 輪:乳白 胎上:淡灰褐色 輪:乳白 胎上:淡褐色	見込輪脚。粗製品	反転復元
40	42	第2トレンチ	青花	碗		(4.6)		胎上:白色 輪:透明輪		反転復元
41	43	第1トレンチ東リ山東	青花	碗		(5.6)		胎上:白色 輪:透明輪		反転復元
42	38	B6-b	青花	小坪	(6.4)			胎上:白色 輪:透明輪		
43	34	第1トレンチ東リ山東	青花	盤	(25.4)			胎上:淡灰褐色 輪:透明輪	青海波文	反転復元
44	37	第1次リ山東	青花	盤				淡灰白色	砂高台	
45	25	B3-b(灰褐色土)	白磁	皿	(12.1)	2.6	6.8	灰色	口縁部端反	反転復元
46	20	C2-c	李朝陶器	碗		(4.0)		胎上:灰褐色~黄褐色 胎上:茶褐色~灰褐色	底部内面に口跡	反転復元
47	9	西脇礼賀(ズミ山中~下層)	備前	瓶		6.5		茶褐色	底部に○印	反転復元
48	56	No.267 四歩表鉢	備前	花生	(19.0)			胎上:灰褐色 表面:茶褐色		反転復元
49	79		備前	鉢	(21.2)			赤褐色	細きやや倒れる	反転復元
50	3	D2-c(ズミ山中)	備前	湯鉢	(28.5)			赤~明赤褐色		反転復元
51	73	B2-d	陶器	鉢	(31.6)		(31.6)	赤褐色	外面に門脚、無輪 色 上に垂れ付けによる装飾	反転復元

表1 出土遺物観察表1

拂岡 番号	実測 番号	出土地点	種別	器種	法 量 (cm)				
					現存長	幅(底部)	幅(基部)	厚さ	I 週
52	75		鉄製品	タガネ?	6.5		1.7×1.2		
53	77	B2-d	鉄製品	タガネ?	4.5		1.7×1.1		
54	74		鉄製品	タガネ	9.3	1.7×1.7	1.5×1.5		
55	76		鉄製品	タガネ?	5.4		1.2×1.4		
56	78	B3-d (灰褐色 土)	鉄製品	用意不明品、 リング状				0.25	外径: 3.9 内 径: 1.8
57	71		鉄製品	用意不明品、 リング状	2.9				0.6角
58	72	B3-b	鉄製品	用意不明品、 リング状	3.7		1.0~1.1	0.25	
59	61	C3-a	鉄製品	和釘	3.9	1.4×0.8			0.5角
60	62	B2-d	鉄製品	和釘	4.9				0.6角
61	67	C2-d	鉄製品	和釘	6.3	0.9×0.5			0.5×0.4角
62	68	C3-a	鉄製品	和釘	2.9	約0.8×0.5			0.4角
63	69	C2-d	鉄製品	和釘	4.8	0.7×0.5			0.2~0.4角
64	66	C3-a	鉄製品	和釘	5.7	約1.0×0.8			0.5~0.6角
65	65	C2-c	鉄製品	和釘	5.3				0.55角
66	70	C2-c	鉄製品	和釘					0.5~0.7角
67	45	第1トレンチ西	青銅製品	かんざし	13.7				
68	46	B3-b	青銅製品	把手金具	9.5		把手幅: 0.9 取手	把手幅: 0.9 取手	
69	50	C3-b	銅製品	キセル	4.9				0.3の八角 形 頭部径: 1.2 頭部高: 0.5
70	47	第2トレンチ	青銅製品	小柄	7.2		1.3	0.4~0.6	
71	54	C3-a	カラミ				3.1×2.1の 三角形状	0.9 (0.9~ 1.1)	
72	53	北西挖掘区下層	カラミ				4.8×4.6	0.8 (0.45~ 1.1)	
73	55	C2-c	土製品	木コ					
74	52	C3-c	土製品	木コ			4.0 (最大)	1.5 (最大)	
75	51	C2-c	土製品	木コ				0.8 (最大)	
76	59	B3-b	土製品	パイゴ目口	15.5				逆風輪: 6.0 逆風輪: 3.2 炉輪: 1.9
77	49	C3-a	石製品	砥石	7.5		4.2 (最大)	1.4	
78	63	49周より下アリ 山地西斜面表層 付近	石製品	石臼	8.8				径: 20.3 (最 大) 中央孔: 2.2
79			土師器	木コ					

表2 出土遺物観察表2

番号	種	厚さ	重量	出土地点
1	17.5	5.3	2.38	2トレンチ
2	18.5	6.7	2.86	C2A2
3	18.5	7.5	2.91	C2A3
4	19	4.4	2.08	表探
5	19.9	6	3.06	西壁掘区
6	20	9	4.43	B3B3
7	21	4	2.79	表探
8	21	6.8	4.41	c2d310
9	21.5	6	4.16	B3B
10	21.5	6.7	4.38	C3A2
11	22.5	6.3	3.28	表探
12	22.5	7	5.12	C2A3
13	24	5.7	3.84	表探
14	24	10	6.21	南西壁
15	25	4.5	2.72	表探
16	25.5	6.5	4.68	C2D3
17	25.5	8	5.22	C3A2
18	25.5	11.2	9.83	表探
19	26.8	7.7	6.61	C2C2
平均値	22.1	6.8	4.3	

表3 小石集計表 (番号はPL. 23下段と対応)

写真番号	種別	出土地点	備考	写真番号	種別	出土地点	備考
80	石見焼	H10 2T		127	肥前系陶器	H11 C2b	1600~10年代
81	土師器	H10 2T		128	肥前系陶器	H11 C2c	1600~10年代
82	陶器	H10 2T		129	肥前系陶器	H11 南西壁	1600~10年代
83	青花	H10 2T		130	肥前系陶器	H11 C2a 他	
84	青花	H10 2T		131	肥前系陶器	H12 表彩	
85	青花	H12 2T ズリ内		132	肥前系陶器	H12 北西延張区	1610~30年代
86	青花	H12 2T 茶褐色		133	肥前系陶器	H11 C2d	1600~10年代
87	土師器	H12 2T 第2面上		134	肥前系陶器	H12 北西延張区	刷毛目
88	肥前系陶器	H12 2T 第2面上	1590~1600年代	135	肥前系陶器	H12 北西延張区	
89	青花	H12 2T 第1面上		136	肥前系陶器	H12 北西延張区	
90	青花	H12 2T 七留石模		137	陶器	H11 C2c	
91	肥前系陶器	H12 2T 第3面上		138	陶器	H12 北西延張区	
92	肥前系陶器	H12 2T 第4面上	1600~10年代	139	肥前系陶器	H12 西延張区 他	1590~1610年代
93	肥前系陶器	H10 2T	1600~50年代	140	肥前系陶器	H11 トレンチ	1600~10年代
94	青花	H12 1T		141	肥前系陶器	H12 北西延張区	刷毛目
95	白磁	H12 1T	中国產	142	陶器	H11 C3a	
96	青花	H12 1T		143	陶器	H12 表彩	
97	青花	H12 1T		144	青花	H12 北西延張区	
98	肥前系陶器	H12 1T	1600~10年代	145	青花	H12 北西延張区	陶胎
99	肥前系陶器	H12 49間歩		146	青花	H11 南西壁	
100	青花	H12 1T		147	青花	H11 C2a	
101	肥前系陶器	H12 49間歩		148	青花	H11 C2c	
102	肥前系陶器	H12 49間歩	1600~50年代	149	柴付	H11 C2a	
103	肥前系陶器	H12 49間歩	1600~50年代	150	柴付	H11 C2b	
104	肥前系陶器	H12 49間歩	刷毛目	151	青花	H12 表彩	
105	青花	H12 267間歩		152	青花	H11 C3b	
106	青花	H12 267間歩		153	青花	H11 C2c 他	
107	青花	H12 267間歩		154	青花	H11 C3c	
108	青花	H12 267間歩		155	柴付	H12 西延張区ズリ山	陶胎
109	青花	H12 267間歩		156	青花	H12 西延張区	陶胎
110	青花	H12 267間歩		157	青花	H11 C2b	
111	青花	H12 267間歩		158	青花	H11 北斜面T	
112	瀬戸	H12 267間歩		159	青花	H11 C2d	
113	肥前系陶器	H12 267間歩		160	青花	H12 西延張区	
114	肥前系陶器	H12 267間歩		161	青花	H11 B3b	
115	肥前系陶器	H12 267間歩	1640~50年代	162	青花	H12 北西延張区	
116	肥前系陶器	H11 C2c	1640~50年代	163	青花	H11 北斜面T	
117	肥前系陶器	H11 C2c	1640~50年代	164	施釉陶器	H11 C3a	朝鮮產
118	肥前系陶器	H11 北斜面T	1640~50年代	165	白磁か	H11 C2a	中国產か
119	肥前系陶器	H11 北斜面T	1640~50年代	166	白磁	H11 B3b	中国產
120	肥前系陶器	H11 C2b 他	1640~50年代	167	白磁	H11 C3a	中国產
121	瀬戸美濃	H11 西延張区		168	青花	H11 C3a	陶胎
122	瀬戸美濃	H11 C3a		169	青花	H11 B3b	
123	瀬戸美濃	H11 C3c		170	青花	H11 B2d	
124	陶器	H11 西延張区		171	青花	H11 西延張区	
125	陶器	H11 南壁石列右側上		172	五彩	H11 北斜面T	
126	瀬戸美濃	H11 西延張区		173	五彩	H11 B3b	

表4 出土地点表(写真図版のみの遺物)

第5章 まとめと課題

第1節 平坦面と間歩について

於紅ヶ谷地区の調査は、今年度で3年次を迎えたが、これまでの調査によって平坦面の利用状況が次第に明らかとなってきた。

最も古い遺物は、整地土層より出土した16世紀前半～中頃にかけてのものが1点あるが、遺構と対比できないため、今後の最大の課題となる。しかしながら下層を掘り下げる上においては、現時点での調査の概略をまとめ、意義付けと評価を試みる必要があると考えられる。

したがって以下に調査区内における土層等の検討から、現時点で予測される土地利用の変遷等について記しておきたい。

①平坦面の北側は、規模の大きな造成によって構築された可能性がある。

西セクションに伴う下層確認と、No.267間歩の再採掘及び石垣の構築の調査から、調査区北半にかけて大量の整地層が見られた。この整地は平坦面東側に見られた岩盤を埋めているため、平坦面の構築よりも早くに採掘が行われていた可能性が考えられる。また、採掘を放棄あるいは修了した段階で、広く土地を確保する必要があったことも見逃せない。出土した陶器が示す年代は、概ね1600年～1610年代頃と見られ、石見銀山の歴史において画期となっている徳川氏の掌握に係る要素を考慮しなければならないであろう。

今後の課題は、礎石列から見た建物の復元的な考察と、建物内の空間配置などがあげられる。

②建物跡内では複数回の小規模な整地が時期差をもって行われた可能性がある。

建物跡の内部において、整地土が部分的に除かれた場所から製錬遺構が現れた。他に、幾度かの斜面からの流入土が認められたり、土間面構築するための小規模な整地も、複数回以上行われていたことが確認された。

③製錬遺構が存在し、付近に採掘の現場があ

る。

今回報告した遺構の他に、内部に炭を充填させ、酸化による赤変が認められた遺構が存在した。また、No.49間歩前トレンチでは、建物跡の時期と同じ時期の遺物が出土し、建物跡から間歩に至る一連の様相が明らかにできる可能性が想定された。

④今回検出した建物跡が役割を終えた後、再度周囲を開発し、採掘していたことが明らかとなった。

No.267間歩では再採掘が行われていたことが確認された。他にNo.49間歩を両側から埋め尽くしている土砂の上層は、ほとんどがズリであって、これによりNo.49間歩が半ば埋まっていることが判明した。

新しい時期と見られる周囲の間歩は、いずれも坑口を矩形に掘ることが特徴であった。またNo.49間歩前に設定したトレンチでは、ズリの直下から青花や肥前陶器が出土した。調査途中であるが、少なくともこの土砂に覆われていた部分については、建物跡との同時期の遺構が検出されることも予想され、また、より古い段階の状況を探りうる可能性が想定される。

⑤再採掘や上方の矩形の間歩によって採掘されたズリが堆積している他に、マウンド状を呈する遺構が調査された。そのマウンドを回り込むようにして、新しい段階の道が検出された。

以上の5点が主な項目である。

今後の調査の方向としては、今回中途となつたNo.49間歩前の具体的な解明と、16世紀代に遡る段階における状況の解明が、期待される。

第2節 出土遺物について

(1) 陶磁器からみた於紅ヶ谷地区的時期

日本製陶磁器としては（中世）土師器、瀬戸美濃、肥前系陶器、肥前系磁器、備前、石見焼がある。輸入陶磁器としては青花、白磁、五彩、李朝陶器がある。近年の中近世遺跡における調査研究の進展により、生産地や消費地年代が押さえられる遺物が多くなっているので、これらを参考に於紅ヶ谷地区的陶磁器を見てみる。

瀬戸美濃（8・9）は大窯3～4期（1550～1600年）と思われる。^(注2)志野は大阪城跡の調査研究により豊臣後期（1598～1615）から出現する。備前播鉢（137）は放射状に加え、斜め方向の描目があり、近世1期（16世紀第2四半期～17世紀第1四半期）と思われる。

肥前系陶器は（12・13・14・19・20・22・24）は1600～1610年代、（16・18・21）は1610～1630年代、（25）は17世紀中頃、（26）は1590～1600年代と思われ、1600～1610年代の遺物が多い。^(注3)肥前系磁器は1640～1650年代の遺物である。

青花は（35）の皿のようなやや古手もあるが、多くは16世紀後半から17世紀初めのものと考えられる。^(注4)

以上のように、16世紀後半から17世紀初めの遺物が多いが、肥前系磁器も含んでいることから、於紅ヶ谷地区的遺物は17世紀中頃までの遺物を含んでいることになる。

(2) 於紅ヶ谷地区出土陶磁器の組成

① 目的

石見銀山遺跡は16世紀～20世紀の数百年間、人々の生活の場となって、各時代における地形の変更が著しい。数cm盛土して造構面を築く場合や造構面を削り周辺を盛土する事により平坦面を広げている例などがある。これらの造成の仕方などから出土遺物についても整地層にも遺物が混入し、遺物の出土状況と造構面を完全に把握できない場合が多い。また、生産遺跡という特異性から遺物の種類が限られる可能性もある。

る。

しかし、石見銀山遺跡の歴史をより具体的にするには造構面や造構の時期や、遺物の全体としての様相を押さえていく必要があり、それにより調査地区の性格を考えられると思われる。

今回、於紅ヶ谷地区的陶磁器の集計作業を行った。^(注5)

② 方法

出土遺物のうち、陶磁器の集計を行う。造構内の出土遺物については各造構ごとに集計すべきであるが、今回の調査区では造構内から遺物がまとまって出土しておらず、また、遺物がどの造構面に伴うかがはっきりしないものが多いことから、トレンチ及びその他の調査区出土遺物として分類集計する。集計は接合前の破片数としてカウントしたが、調査により破損したものは破損前の数字とした。^(注6)なお、於紅ヶ谷地区は来年度以降も発掘調査が実施されるので、この集計は中間的なものである。

於紅ヶ谷地区的中心的な時期は、遺物の概要から16世紀後半から17世紀であり、他の同時期の遺跡を参考に、土師器、瀬戸美濃、備前、肥前系陶器、肥前系磁器、青花、中国製白磁、五彩、李朝陶器、その他不明の陶磁器と分類した。各陶磁器は型式別にさらに分類可能であるが、中間報告ということで細分はしなかった。器種についてわかるものは、皿、碗、盤、播鉢の器形と灰釉、黒釉等の釉色との組み合わせにより集計表を作成した。その他に分類したものの中には、器種が不明なものも含んでいる。

③ 集計の結果

今回出土した陶磁器は石見焼12点、土師器99点、瀬戸・美濃系11点、備前系陶器19点、肥前系陶器133点、肥前系磁器51点、青花130点、中国製白磁11点、五彩2点、李朝陶器2点、不明陶磁器29点の計499点である。石見焼は19世紀のものであり、今回の検討から除外して考えると、出土遺物の割合としては、日本製陶磁器64.27%、輸入陶磁器29.77%、不明陶磁器5.95%であり、日本製陶磁器が約2/3を占める。

少し細かく見ると土師器20.33%、備前3.9%、瀬戸美濃2.26%、唐津系(肥前系陶器)27.31%、伊万里系(肥前系磁器)10.47%、輸入陶磁器29.77%、不明陶磁5.95%となる。輸入陶磁器では青花が多く、輸入陶磁器内での比率は青花が89.66%、白磁が7.59%、五彩が1.37%、李朝陶磁器が1.37%を占め、碗・皿等の供膳具である。

(3) 石見銀山遺跡内の陶磁器組成

於紅ヶ谷地区の陶磁器の特徴を見いだすために同時期の遺構や遺物が出土している他の地区的組成と比べてみる。

①旧河島家地区 平成2年度調査

旧河島家地区の調査では、16世紀後半から近現代までの遺物が出土している。表土下50cmの遺構面から井戸跡や石組の炉跡、石列が検出されている。その下は礫やカラミ等を含んだ整地層であった。整地層や遺構面から、16世紀後半から17世紀前半を中心とした遺物が出土しており、報告書に遺物の集計数値が記載されている。

②山吹城下屋敷地区 平成4年度調査

山吹城下屋敷地区的調査では昭和18年以前の水田層の下層から炉跡や建物跡が検出されている。建物跡は東西半間、南北一間間隔の礎石が発見されている。16世紀後半から17世紀の青花、胎土目の灰釉碗・皿が中心で、砂目の灰釉皿が1点出土している。

③大龍寺谷地区 平成2年度調査

大龍寺谷地区的調査では、16世紀後半から17世紀前半を中心とした遺物が出土している。表土下80~90cmの遺構面から設置された要石やビットが検出されている。遺構面自体も遺物包含層である。青花や灰釉碗・皿が中心で、五彩碗や青磁香炉、信楽壺なども出土している。報告書に各遺物の産地や時期が掲載されており、今回の集計表に基づき、集計してみた。

以下、集計結果である。

	土 師 器	備 前	瀬 戸 美 濃	唐 津 系	伊 万 里 系	輸 入 陶 磁	不 明
旧河島家	9.88	0.58	0.58	37.21	9.88	12.79	29.08
山吹城下屋敷	3.8	0.63	5.7	62.66	1.9	13.29	12.02
大龍寺谷	4.17	2.98	1.19	49.4	6.55	27.98	7.73
於紅ヶ谷	19.84	3.81	2.2	26.65	10.22	29.06	8.22

表5 出土遺物集計表1(%)

於紅ヶ谷地区と同様、他の地区においても、遺物がどの遺構面に伴うか不確定なものがあり、また、平坦面の造成のため前代の遺物が混入する場合も多々あると考えられる。厳密には比較できないが、調査地区的概要を示しているものと推定できる。於紅ヶ谷地区は他の地区と違い、土師器の比率が高く、輸入陶磁器についても大龍寺谷地区と同様に比率が高い。唐津系の比率がやや低く、山吹城下屋敷地区的半分以下である。唐津系が担っていた用途・性格が土師器や輸入陶磁器でまかなわれていた可能性がある。

於紅ヶ谷地区は石銀地区という山上で、周辺に採掘する間歩が多く存在するのに対し、旧河島家や山吹城下屋敷地区、大龍寺谷地区は休谷など谷部に存在し、地区的機能差や性格の差があることも考える必要がある。今後、同じ石銀地区で調査された藤田地区や千畳敷地区の遺物組成と比較する必要がある。

(4) 富田川河床遺跡との比較

於紅ヶ谷地区で出土した遺物の時期は16世紀後半から17世紀代を中心としている。周辺で同時期の代表的な城下町遺跡である能義郡瀬町富田川河床遺跡と比較してみる。

富田川河床遺跡7次調査では、洪水のたびごとに町並みが砂で埋没していることがわかり、層位的な発掘調査により、16世紀後半から1666年までの遺構面が5面確認されている。時期と出土陶磁器が以下の通り整理されている。

	土 師 器	備 瀬 戸 美 濃	唐 津 系	伊 万 里 系	輸 入 陶 磁
第1遺構面 (1666年)	9	15	30	33	13
第2遺構面 (1644年前後)	16	21	41	5	17
第3遺構面	23	18	35	—	24
第4遺構面	43	24	—	—	33
第5遺構面	41	22	—	—	33
於紅ヶ谷 (注16)	22	6	29	11	32

表6 出土遺物集計表2

富田川河床遺跡の調査結果から、第4遺構面から第3遺構面への変化は中国産と土師器が占める割合が低下し、この二者の持つ機能が唐津系に替わることが判明した。また、寛永廿一年(1644)年銘の木簡が出土した第2遺構面からは伊万里系が確実に使用されている。第1遺構面は1666年の洪水で埋没している。中国産は13%、土師器が9%まで割合が低下し、伊万里系が33%まで増加している。唐津系は比率的に伊万里系に逆転され、伊万里系が多くなっているが、唐津系も1666年においてもまだかなりの比率で使用されていることがわかる。

この富田川河床遺跡の比率変化の中に於紅ヶ谷地区を当てはめると、於紅ヶ谷地区的伊万里系の割合は第2遺構面と第1遺構面の間、唐津系の割合は第1遺構面前後になる。

富田川河床遺跡の陶磁器変化の中で、於紅ヶ谷地区出土の伊万里系の割合を積極的に位置付ければ、現在検出している遺構面は第1遺構面から第2遺構面の間となり、於紅ヶ谷地区的最終遺構面年代は1644～1666年頃であるということになる。

この時期に当てはめて考えると輸入陶磁器の比率が多い。これは、青花盤や五彩盤など石見銀山遺跡ではあまり発見されていない遺物が出土しており、都市としての性格が表されている可能性がある。土師器の割合が多いことは、土

師器皿にタール状付着物や煤が付着する個体が多く、灯明皿として使用されていたと考えられ、採掘のため坑道に入るために使用したか製錬作業等で使用された可能性があり、鉱山遺跡の特徴性かもしれない。

しかし、注意しなければならないことは、この数値は於紅ヶ谷地区の複数遺構面から出土している遺物を総括している数値であり、一部下層の遺構面を検出している箇所があったり、造成により下層遺構が破壊され、前代の遺物が混入したとも考えられる。さらに、富田川河床遺跡は出雲国を中心とした城下町遺跡であり、両遺跡とも特殊な遺跡といえるので、今後、周辺の遺跡や他の同時期の鉱山遺跡と比較する必要がある。

(5) 於紅ヶ谷地区的陶磁器

出土陶磁器の器種をみると碗皿が大多数であり、瓶や壺などの貯蔵具や擂鉢や鉢など調理具は少なく、土鍋においては見いだせない。貯蔵具や調理具の少なさは於紅ヶ谷地区的性格を表しているかあるいは遺構廃絶時に持つ移動し、遺構が使われている時に割れたものだけが現地に残った可能性が指摘できる。後者については、出土遺物の破片が小さいことも傍証するかもしれない。^(注18)

破片数の少ない遺物として、古瀬戸香炉、備前水指、茶壺の可能性もある褐色釉のかかった小壺、李朝陶器碗、青花盤、五彩盤が出土している。石見銀山遺跡の調査は昭和58年度から随時実施され、陶磁器もかなりの量が出土している。全ての調査区の陶磁器を調査していないが、古瀬戸や備前水指は初めて出土している。五彩は下川原地区や大龍寺谷地区I区から碗が出土しているが、盤は初めてである。^(注19)

(6)まとめ

石見銀山遺跡は、日本産陶磁器だけではなく、中国や朝鮮半島産陶磁器など多くのものが消費されていた。最近研究が進んできた都市と

しての様相が遺物や遺構の上からも明らかになりつつある。今後発掘調査により、石見銀山遺跡の様相の把握を具体的に行う必要がある。

注1 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター東森晋氏の御教示による。

注2 藤澤良裕『瀬戸美濃大窯の編年』

『瀬戸市史陶磁史篇四』愛知県瀬戸市 1993

注3 森毅『秀吉期城郭出土の土器・陶磁器』

『土器・陶磁器からみた織豊期城郭』 1999

注4 乗岡実『備前焼擂鉢の編年について』

『第3回中近世備前焼研究会資料』 2000

注5 佐賀県有田町立歴史民俗資料館村上伸之氏の御教示による。

九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000

注6 森毅『16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大阪の資料を中心に—』

『ヒストリア』149 大阪歴史学会 1995

注7 石見銀山遺跡の陶磁器については下記の文献がある。

遠藤浩巳『大田市・石見銀山遺跡の調査と出土陶磁器』『松江考古8』1992

注8 集計するにあたり、広島県立美術館村上勇氏、有田町立歴史民俗資料館村上伸之氏の御協力を得たが、調査指導後に出土した遺物もあり、自分で分類したものもある。

注9 大田市教育委員会
『代官所地役人旧河島家住宅修理工事報告書』
1992

注10 大田市教育委員会
『石見銀山遺跡発掘調査概要6』1993

注11 大田市教育委員会
『石見銀山遺跡発掘調査概要4』1991

注12 集計分類方法の違いにより、一部報告書記載の集計結果と一致しなかった。

注13 不明（その他）には不明陶磁器や瓦、信楽、須恵器、石見焼を含み、端数処理し、全体が100%になるようにした。

注14 今回比較した各地区では微妙に消長時期が異なる可能性がある。

注15 島根県教育委員会

『富田川河床遺跡発掘調査報告書III』 1983

注16 於紅ヶ谷地区も富田川河床遺跡の集計を参考に数値を並べた。不明陶磁器を外し、李朝陶器は輸入品ということで、取りあえず中国産に入れた。

注17 富田川河床遺跡と石見銀山遺跡の陶磁器比率の差は、石見銀山遺跡の集計誤差、あるいは富田川河床遺跡の陶磁器比率変化内とも考えられる。

注18 万德院跡の陶磁器を検討した沢元氏は万德院跡から座敷飾りなどの陶磁器が出土していない理由として、遺跡の存続期間が短いことも一因とながら遺跡の移転に伴う伸び出しが考えている。

沢元保夫『万德院跡出土の陶磁器類』

『万德院跡の研究』広島県教育委員会 2000

注19 五彩が出土した大龍寺谷地区I区からは中国製青磁の香炉が出土している。

参考文献

[資料1] 海野一隆『地図に見る日本』

大修館書店 1999

[資料2]『石見銀山遺跡総合調査報告書』

第1～6回 1999島根県教育委員会
・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会
・仁摩町教育委員会

[資料3]『石見銀山遺跡発掘調査概要』1～10
大田市教育委員会(・島根県教育委員会)

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	12	54.55%
土器	皿	2	9.09%
古瀬戸	香炉	0	0.00%
瀬戸・美濃	灰釉皿	0	0.00%
	天目茶碗	0	0.00%
	志野皿	0	0.00%
小計		0	0.00%
備前	擂鉢	0	0.00%
	壺・甕	0	0.00%
その他		2	9.09%
小計		2	9.09%
肥前系陶器	灰釉皿	0	0.00%
	灰釉碗	0	0.00%
	大皿	0	0.00%
	鉢	0	0.00%
灰釉その他		0	0.00%
藁灰釉		0	0.00%
袋物		0	0.00%
小計		0	0.00%
肥前系磁器	皿	1	4.55%
	碗	0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		1	4.55%
日本製品小計		17	77.27%
青花	皿	2	9.09%
	碗	3	13.64%
	盤	0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		5	22.73%
白磁	皿	0	0.00%
小坏		0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		0	0.00%
五彩	盤	0	0.00%
李朝陶器	碗	0	0.00%
輸入陶磁器小計		5	22.73%
不明磁器		0	0.00%
不明陶器		0	0.00%
不明陶磁器小計		0	0.00%
合計		22	100.00%

表7 H10年度第2トレンド遺物集計表

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	0	0.00%
土器	皿	2	10.53%
古瀬戸	香炉	0	0.00%
瀬戸・美濃	灰釉皿	0	0.00%
	天目茶碗	1	5.26%
	志野皿	0	0.00%
小計		1	5.26%
備前	擂鉢	0	0.00%
	壺・甕	0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		0	0.00%
肥前系陶器	灰釉皿	1	5.26%
	灰釉碗	0	0.00%
	大皿	1	5.26%
	鉢	1	5.26%
灰釉その他		2	10.53%
藁灰釉		0	0.00%
袋物		3	15.79%
小計		8	42.11%
肥前系磁器	皿	0	0.00%
	碗	0	0.00%
その他		2	10.53%
小計		2	10.53%
日本製品小計		13	68.42%
青花	皿	1	5.26%
	碗	2	10.53%
	盤	2	10.53%
その他		0	0.00%
小計		5	26.32%
白磁	皿	1	5.26%
小坏		0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		1	5.26%
五彩	盤	0	0.00%
李朝陶器	碗	0	0.00%
輸入陶磁器小計		5	22.73%
不明磁器		0	0.00%
不明陶器		0	0.00%
不明陶磁器小計		0	0.00%
合計		19	100.00%

表8 №49間歩遺物集計表

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	0	0.00%
土器	皿	3	17.65%
古瀬戸	香炉	1	5.88%
瀬戸・美濃	灰釉皿	0	0.00%
	天目茶碗	0	0.00%
	志野皿	0	0.00%
小計		1	5.88%
備前	擂鉢	0	0.00%
	壺・甕	0	0.00%
その他		1	5.88%
小計		1	5.88%
肥前系陶器	灰釉皿	0	0.00%
	灰釉碗	0	0.00%
	大皿	0	0.00%
	鉢	0	0.00%
灰釉その他		0	0.00%
藁灰釉		0	0.00%
袋物		0	0.00%
小計		0	0.00%
肥前系磁器	皿	1	5.88%
	碗	0	0.00%
その他		3	17.65%
小計		4	23.53%
日本製品小計		9	52.94%
青花	皿	0	0.00%
	碗	0	0.00%
	盤	0	0.00%
その他		8	47.06%
小計		8	47.06%
白磁	皿	0	0.00%
小坏		0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		0	0.00%
五彩	盤	0	0.00%
李朝陶器	碗	0	0.00%
輸入陶磁器小計		6	31.58%
不明磁器		0	0.00%
不明陶器		0	0.00%
不明陶磁器小計		0	0.00%
合計		17	100.00%

表9 №267間歩遺物集計表

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	0	0.00%
土器	皿	1	7.69%
古瀬戸	香炉	0	0.00%
瀬戸・美濃	灰釉皿	0	0.00%
	天目茶碗	0	0.00%
	志野皿	0	0.00%
小計		0	0.00%
備前	擂鉢	0	0.00%
	壺・甕	0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		0	0.00%
肥前系陶器	灰釉皿	2	15.38%
	灰釉碗	1	7.69%
	大皿	0	0.00%
	鉢	0	0.00%
灰釉その他		2	15.38%
藁灰釉		0	0.00%
袋物		0	0.00%
小計		5	38.46%
肥前系磁器	皿	0	0.00%
	碗	0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		0	0.00%
日本製品小計		6	46.15%
青花	皿	3	23.08%
	碗	1	7.69%
	盤	1	7.69%
その他		1	7.69%
小計		6	46.15%
白磁	皿	0	0.00%
小坏		0	0.00%
その他		0	0.00%
小計		0	0.00%
五彩	盤	0	0.00%
李朝陶器	碗	0	0.00%
輸入陶磁器小計		6	46.15%
不明磁器		0	0.00%
不明陶器		1	7.69%
不明陶磁器小計		1	7.69%
合計		13	100.00%

表10 平成12年度第2トレンド遺物集計表

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	0	0.00%
土師器	皿	91	21.31%
古瀬戸	香炉	0	0.00%
瀬戸・美濃	灰釉皿	6	1.41%
天目茶碗	2	0.47%	
志野皿	1	0.23%	
小計		9	2.11%
備前	擂鉢	3	0.70%
壺・甕	3	0.70%	
その他		10	2.34%
小計		16	3.75%
肥前系陶器	灰釉皿	45	10.54%
	灰釉碗	16	3.75%
	大皿	8	1.87%
	鉢	6	1.41%
灰釉その他		16	3.75%
磁灰釉	3	0.70%	
	袋物	25	5.85%
小計		119	27.87%
肥前系磁器	皿	12	2.81%
	碗	11	2.58%
その他		21	4.92%
小計		44	10.30%
日本製品小計		279	65.34%
青花	皿	45	10.54%
	碗	26	6.09%
	盤	7	1.64%
その他		28	6.56%
小計		106	24.82%
白磁	皿	7	1.64%
	小坏	1	0.23%
その他		2	0.47%
小計		10	2.34%
五彩	盤	2	0.47%
李朝陶器	碗	2	0.47%
輸入陶磁器小計		120	28.10%
不明磁器		13	3.04%
不明陶器		15	3.51%
不明陶磁器小計		28	6.56%
合計		427	100.00%

表11 その他の調査区遺物集計表

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	12	2.40%
土師器	皿	99	19.84%
古瀬戸	香炉	1	0.20%
瀬戸・美濃	灰釉皿	6	1.20%
天目茶碗	3	0.60%	
志野皿	1	0.20%	
小計		11	2.20%
備前	擂鉢	3	0.60%
壺・甕	3	0.60%	
その他		13	2.61%
小計		19	3.81%
肥前系陶器	灰釉皿	48	9.62%
	灰釉碗	17	3.41%
	大皿	9	1.80%
	鉢	7	1.40%
灰釉その他		20	4.01%
磁灰釉	4	0.80%	
	袋物	28	5.61%
小計		133	26.65%
肥前系磁器	皿	14	2.81%
	碗	11	2.20%
その他		26	5.21%
小計		51	10.22%
日本製品小計		325	65.13%
青花	皿	51	10.22%
	碗	32	6.41%
	盤	10	2.00%
その他		37	7.41%
小計		130	26.05%
白磁	皿	8	1.60%
	小坏	1	0.20%
その他		2	0.40%
小計		11	2.20%
五彩	盤	2	0.40%
李朝陶器	碗	2	0.40%
輸入陶磁器小計		145	29.06%
不明磁器		13	2.61%
不明陶器		16	3.21%
不明陶磁器小計		29	5.81%
合計		499	100.00%

表12 於紅ヶ谷地区総破片数

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	0	0.00%
土師器	皿	99	20.33%
古瀬戸	香炉	1	0.21%
瀬戸・美濃	灰釉皿	6	1.23%
天目茶碗	3	0.62%	
志野皿	1	0.21%	
小計		11	2.26%
備前	擂鉢	3	0.62%
壺・甕	3	0.62%	
その他		13	2.67%
小計		19	3.90%
肥前系陶器	灰釉皿	48	9.86%
	灰釉碗	17	3.49%
	大皿	9	1.85%
	鉢	7	1.44%
灰釉その他		20	4.11%
磁灰釉	4	0.82%	
	袋物	28	5.75%
小計		133	27.31%
肥前系磁器	皿	14	2.87%
	碗	11	2.26%
その他		26	5.34%
小計		51	10.47%
日本製品小計		313	64.27%
青花	皿	51	10.22%
	碗	32	6.57%
	盤	10	2.05%
その他		37	7.60%
小計		130	26.69%
白磁	皿	8	1.64%
	小坏	1	0.21%
その他		2	0.41%
小計		11	2.26%
五彩	盤	2	0.41%
李朝陶器	碗	2	0.41%
輸入陶磁器小計		145	29.77%
不明磁器		13	2.67%
不明陶器		16	3.29%
不明陶磁器小計		29	5.95%
合計		487	100.00%

表13 於紅ヶ谷地区総破片(石見焼以外)

種類	器類	破片数	割合
石見焼	徳利	0	0.00%
土師器	皿	99	21.62%
古瀬戸	香炉	1	0.22%
瀬戸・美濃	灰釉皿	6	1.31%
天目茶碗	3	0.66%	
志野皿	1	0.22%	
小計		11	2.40%
備前	擂鉢	3	0.66%
壺・甕	3	0.66%	
その他		13	2.84%
小計		19	4.15%
肥前系陶器	灰釉皿	48	10.48%
	灰釉碗	17	3.71%
	大皿	9	1.97%
	鉢	7	1.53%
灰釉その他		20	4.37%
磁灰釉	4	0.87%	
	袋物	28	6.11%
小計		133	29.04%
肥前系磁器	皿	14	3.06%
	碗	11	2.40%
その他		26	5.68%
小計		51	11.14%
日本製品小計		313	68.34%
青花	皿	51	11.14%
	碗	32	6.99%
	盤	10	2.18%
その他		37	8.08%
小計		130	28.38%
白磁	皿	8	1.75%
	小坏	1	0.22%
その他		2	0.44%
小計		11	2.40%
五彩	盤	2	0.44%
李朝陶器	碗	2	0.44%
輸入陶磁器小計		145	31.66%
不明磁器		0	0.00%
不明陶器		0	0.00%
不明陶磁器小計		0	0.00%
合計		458	100.00%

表14 於紅ヶ谷地区総破片(石見焼・不明以外)